

### 「成長させて下さるのは神」



熊本真愛教会 金田 洋介

わたしは植え、アポロは水をそそいだ。しかし成長させて下さるのは、神である。だから、植える者も水をそそぐ者も、ともに取るに足りない。大事なものは、成長させて下さる神のみである。

#### 1 コリント3・6～7

二〇一九年八月、青年宣教大会が東北と関西の会場で開催され、私は東北の会場に参加しました。すると、参加者の中にかつて私が母教会の教会学校で教えていた生徒たち、また、東北教区のバイブルキャンプで関わった子たちが大学生や社会人となって参加していたのです。私は彼らとの再会を喜び、彼らの信仰を守り、クリスチャンとして成長させて下さった神様の御名を崇めました。

#### 一、植える者、水を注ぐ者として

コリントの教会はパウロの伝道によって建て上げられ、その後アポロに引き継がれていきました。また、使徒ペテロもコリントで伝道しま

した。主によって立てられた個性豊かな伝道者たちによって教会は成長しました。

私が今遣わされている教会では、救霊はもちろん、人格的な関わり、生きて行くための必要（貧困や教育）へのチャレンジをいただいています。このように、教会学校に多様化が求められる中、神様は子どもたちのために、「植える者、水を注ぐ者として」私たちを選び、それぞれの個性や賜物を最大限に用いて下さることを覚えたいのです。

#### 二、成長させて下さるのは神である

成長していくコリントの教会の中に、指導者を巡って分派が生じてしまいます。それは、教会の成長の背後に、指導者を用いられた神様がおられることを悟っていなかったからでした。そこでパウロは、「大切なものは植える者でも、水を注ぐ者でもなく、成長させて下さる神だけである」と教えたのです。

子どもたちの救霊のために、神様を選び立てられた教師とは、自らの未熟さ、至らなさを嘆く者でも、まして、子どもの魂の救いや成長の結実を自らの働きの成果であると誇る者でもなく、「成長させて下さるのは神である」ことを信じ、神様に栄光を帰する者なのです。

# 牧羊者

## 目次

巻頭言	1
目次	2
カリキュラム	3
教師養成講座「教会学校における 次世代への宣教と信仰継承（１）」	4
出エジプト Ⅰ 1／5 ～ 1／26	11
キリストの十字架への道 Ⅱ 2／2 ～ 3／29	35
牧羊ひろば（北大阪教会）	89
「牧羊者」のご購読・ご利用について	96
おわりに	96

### 〔凡例〕

1. 原語について：ギリシャ語は〔ギ〕、ヘブル語は〔ヘ〕、アラム語は〔ア〕で表記しています。
2. 礼拝メッセージ例の最後の「さんび」の略記について  
こ：「こどもさんびか」、こ改：「こどもさんびか改訂版」（以上、日本キリスト教  
団出版局）、ホ：「教会学校・日曜学校 子どもさんびか」（日本ホーリネス教団出  
版局）、イン：「教会学校さんびか」（インマヌエル教会学校部）、ふ：「ふくいん子  
どもさんびか」、GS：「ふくいんこどもさんびか2 グローイング・ソング」（以  
上、日本児童福音伝道協会）、PW：「プレイズワールド」（リビングプレイズ）

# 新しい生き方

ヨハネ 13:34

## ● 出エジプト

行事	テーマ	聖書	暗唱聖句
1月5日 新年礼拝	過越	出エジプト 12:1～14	同 13節
12日	海を渡る	出エジプト 14:10～27	同 13節
19日	荒野で与えられた食物	出エジプト 16:31～36	同 35節
26日	祈りの手	出エジプト 17:8～16	同 11節

## ● キリストの十字架への道

行事	テーマ	聖書	暗唱聖句
2月2日	ナルドの香油	ヨハネ 12:1～8	同 3節
9日	一粒の麦として	ヨハネ 12:20～28	同 24節
16日	洗足の恵み	ヨハネ 13:1～15	同 8節
23日	道なるキリスト	ヨハネ 14:1～6	同 6節
3月1日	別の助け主	ヨハネ 14:12～17	同 16節
8日	キリストにある平安	ヨハネ 14:27～31	同 27節
15日	ぶどうの木なるキリスト	ヨハネ 15:1～8	同 5節
22日	最大の愛	ヨハネ 15:12～17	同 13節
29日	キリストの名による祈り	ヨハネ 16:19～24	同 23節

# 教会学校における 次世代への宣教と信仰継承（1）

香登教会 工藤弘雄



はじめに

二〇一九年度教団標語は「今こそ次世代への宣教と信仰継承」でした。これこそ、今日、私たちの教会、特に教会学校において取り組むべき最大の課題です。聖書や教会の歴史を見るとこの課題は教会がいつの時代においても熱心に取り組んできた課題でした。それでは聖書からこの大切な課題について学ぶことにしましょう。

聖書が語る次世代への宣教と信仰継承

一、聖書は子どもを含めた全家の救いを約束している

救いの体験はあくまでも個人的なものです。救いの契約は家族単位なのです。神の救いの契約は子どもが生まれたときから、子どもは救いの契約の中に入れられているのです。幼児（嬰兒）洗礼や献児式はそのことの表明です。ただしその子どもが自覚的に救いを確信するまで深い祈りをもって導くことが家族や教会に求められています。そこに次世代への宣教と信仰継承の働きがある

と言えるでしょう。これこそキリスト者の両親の努めであり、また教会学校、教会全体の重荷なのです。今、子どもを含めた全家の救いについて聖書がどのように語っているか見ることにしましょう。

## ①ノアの箱舟は家族の救いのためでした。

「信仰によって、ノアはまだ見ていない事柄について神から警告を受けたときに、恐れかしこんで家族の救いのために箱舟を造り、その信仰によって世を罪ありとし、信仰による義を受け継ぐ者となりました。」

（ヘブル11・7）

## ②アブラハムへの契約には子孫が含まれていました。

「わたしは、わたしの契約を、わたしとあなたとの間に、またあなたの後の子孫との間に、代々にわたる永遠の契約として立てる。わたしは、あなたの神、あなたの後の子孫の神となる。」（創世記17・7）

## ③過ぎ越しの子羊は家族ごとのものでした。

「イスラエルの全会衆に次のように告げよ。この月の十日に、それぞれが一族ごとに羊を、すなわち家ごとに羊を用意しなさい。」（出エジプト12・3）

## ④モーセの命令は子どもたちにも及ぶものでした。

「モーセが命じたすべてのことばの中で、ヨシユアが、イスラエルの集会全体、および女と子どもたち、および彼らの間で生活する寄留者の前で読み上げなかったことばは、一つもなかった。」（ヨシユア8・35）

## ⑤ヨシユアの信仰表明は家族全体のものでした。

「…主に仕えることが不満なら、あの大河の向こうにいた、あなたがたの先祖が仕えた神々でも、今あなたがたが住んでいる地のアモリ人の神々でも、あなたがたが仕えようと思うものを、今日選ぶがよい。ただし、私と私の家は【主】に仕える。」（ヨシユア24・15）

## ⑥ペンテコステにおける聖霊の賜物の約束は子どもたちにも及ぶものでした。

「この約束は、あなたがたに、あなたがたの子どもたちに、そして遠くにいるすべての人々に、すなわち、私たちの神である主が召される人ならだれにでも、与えられているのです。」（使徒2・39）

## ⑦使徒パウロが約束したピリピの刑務所の看守の救いは全家族の救いを含むものでした。

「二人は言った。『主イエスを信じなさい。そうすれば、

あなたもあなたの家族も救われます。」「看守はその夜、時を移さず二人を引き取り、打ち傷を洗った。そして、彼とその家の者全員が、すぐにバプテスマを受けた。」

(使徒16・31、33)

⑧両親のうち片親だけがクリスチャンであつてもその子どもは「聖なるもの」と言われました。

「なぜなら、信者でない夫は妻によつて聖なるものとされており、また、信者でない妻も信者である夫によつて聖なるものとされているからです。そうでなかったら、あなたがたの子どもは汚れていることになりませんが、実際には聖なるものです。」(イコリント7・14)

このように聖書の約束を見ると、聖書は子どもを含めた全家の救いをいかに強調しているかがわかります。

## 二、聖書は信仰共同体にいつも子どもを含めている

次に、聖書においては信仰者のあらゆる集いにおいて子どもと大人とを分離していません。通常の礼拝はもとより、神の民の試練の時、また大いなるリバイバルの時、さらに祈り会の中でさえも子どもたちの姿を見出すので

す。次世代への宣教や信仰継承はこうした信仰共同体の中で地道に築き上げられていったのです。

①主の前に出る集いに子どもたちが参加していました。

「イスラエル全体が、主が選ばれる場所に、あなたの神、主の前に出るためにやって来たとき、あなたはイスラエル全体の前で、彼らの耳にこのみおしえを読んで聞かせなければならぬ。民を、男も女も子どもも集めなさい。…これを知らない、彼らの子どもたちもこれを聞き、あなたがたがヨルダン川を渡つて所有しようとしている地で、彼らが生きるかぎり、あなたがたの神、主を恐れることを学ばなければならぬ。」(申命記31・11～13)

②ヨシヤバテ時代に敵軍が襲来する危機の時の礼拝にも子どもたちが参加していました。

「ユダの人々はみな『主』の前に立っていた。彼らの幼子たち、妻たち、子どもたちもともにいた。」

(歴代二20・13)

③エズラ時代の大リバイバル時に子どもたちもその中に参加していました。

「エズラが神の宮の前でひれ伏して、涙ながらに祈り告白しているとき、男や女や子どもの大衆がイスラエル

のうちから彼のところに集まって来た。民は涙を流して激しく泣いた。」(エズラ10・1)

④使徒パウロを見送る海岸での祈り会に子どもたちも一緒に参加していました。

「滞在期間が終わると、私たちはそこを出て、また旅を続けた。彼らはみな、妻や子どもたちと一緒に町の外まで私たちを送りに来た。そして海岸でひざまずいて祈ってから」(使徒21・5)

⑤公同の礼拝の中で朗読される使徒パウロの書簡の中で子どもたちへの呼びかけが含まれています。

「子どもたちよ。主にあって自分の両親に従いなさい。これは正しいことなのです。」(エペソ6・1)

「子どもたちよ、すべてのことについて両親に従いなさい。それは主に喜ばれることなのです。」

(コロサイ3・20)

## 三、主イエスはいつも子どもと共におられた

主イエスは子どもを愛したお方はおられません。主イエスは子どもが大好きであり、何よりも子どもたちも

主イエスが大好きでした。主イエスがおられるところいつも子どもたちも共にいたのです。

①パンの奇跡の時、主イエスは子どものお弁当を用いました。またこの集いには子どもたちもいました。

「ここに、大麦のパン五つと、魚二匹を持っている少年がいます。でも、こんなに大勢の人々では、それが何になるでしょう。」(ヨハネ6・9)

「食べた者は、女と子どもを除いて男五千人ほどであった。」(マタイ14・21)

②主は子どもこそ天国の雛形であると言われました。

「イエスは一人の子どもを呼び寄せ、彼らの真ん中に立たせて、こう言われた。「まことに、あなたがたに言います。向きを変えて子どもたちのようにならないければ、決して天の御国に入れません。」(マタイ18・2、3)

③主は子どもたちを退ける弟子たちに憤られました。

「イエスはそれを見て、憤って弟子たちに言われた。『子どもたちを、わたしのところに来させなさい。邪魔してはいけません。神の国はこのような者たちのものなのです。』(マルコ10・14)

④主は子どもたちの讃美を喜んで受け入れられました。

「ところが祭司長たちや律法学者たちは、イエスがなさったいろいろな驚くべきことを見て、また宮の中で子どもたちが「ダビデの子にホサナ」と叫んでいるのを見て腹を立て、イエスに言った。「子どもたちが何と言っているか、聞いていますか。」イエスは言われた。「聞いています。『幼子たち、乳飲み子たちの口を通して、あなたは誉れを打ち立てられました』とあるのを、あなたがたは読んだことがないのですか。」（マタイ21・15、16）

このように聖書は神の救いの契約が子どもを含めた家族を包含することを語っています。特に両親のどちらかが信者であれば、夫婦、子どもも聖なる者となると驚きです。また、信仰者のあらゆる集いに子どもたちが参加していたことも驚きです。さらに主イエスの子どもへの愛は私たちにとって大きな模範となることでしょう。

#### 四、聖書には次世代への信仰継承の命令が多くある

聖書は大人たちの責任で子どもたちに神を愛すること、恐れること、神のことを学び、実行すること、「十

戒」に従うこと、神のみわざを記憶することなどを命じています。12歳の少年イエスの姿は両親（ヨセフとマリヤ）の下でいかに聖書を学んでいたかの証しです。主イエスが公生涯に立たれる前、「荒野の試誘」においてサタンに勝利したのも神のことばによるものでした。主イエスは律法学者たちや弟子たちに幾度となく、「神のことばを知らないのか、読んだことがないのか」と語られました。また復活後のエマオの途上では弟子たちに律法、詩歌、預言の聖書全巻を語られたのです。これらのことは主イエスが「人の子」としていかに幼い頃から聖書を学ばれたかの証しです。使徒時代におけるテモテは「次世代における宣教と信仰継承」の最もふさわしい証し人です。

①モーセは子どもたちに唯一の神を心、いのち、力を尽くして愛するように教えることを命じています。

「これをあなたの子どもたちによく教え込みなさい。あなたが家で座っているときも道を歩くときも、寝るときも起きるときも、これを彼らに語りなさい。」

（申命記6・7）



②モーセは主のことばを心と魂に刻み、しるしとして手に結び、記章として額に置くことを命じています。

「それをあなたがたの子どもたちに教えなさい。あなたが家に座しているときも道を歩くときも、寝るときも起きるときも、これを彼らに語りなさい。」(申命記11・19)

③モーセは仮庵の祭りの時、次世代の子どもたちにも神を恐れることを命じています。

「これを知らない、彼らの子どもたちもこれを聞き、あなたがたがヨルダン川を渡って所有しようとしている地で、彼らが生きるかぎり、あなたがたの神、主を恐れることを学ばなければならない。」(申命記31・13)

④モーセはイスラエル全体に主のことばを語り、子どもたちにも実行するように命じています。

「彼らに言った。『あなたがたは、私が今日あなたがたを戒める、このすべてのことばを心にとどめなさい。それをあなたがたの子どもたちに命じて、このみおしえのすべてのことばを守り行わせなさい。』」(申命記32・46)

⑤「十戒」は子どもに対しての命令でもあります。

「あなたの父と母を敬え。あなたの神、【主】が与えようとしているその土地で、あなたの日々が長く続くように

するためである。」(出エジプト20・12)

⑥ヨシユアはヨルダン渡河を証しする十二の石が何かを子どもたちに知らせることを命じています。

「あなたがたは子どもたちに『イスラエルは乾いた地面の上を歩いて、このヨルダン川を渡ったのだ』と知らせなさい。」(ヨシユア4・22)

⑦12歳の少年イエスは宮の教師も驚くほどに聖書の知恵に満ちていました。

「聞いていた人たちはみな、イエスの知恵と答えに驚いていた。」(ルカ2・47)

⑧テモテは祖母と母から信仰を受け継ぎました。

「私はあなたのうちにある、偽りのない信仰を思い起こしています。その信仰は、最初あなたの祖母ロイスと母ユニケのうちに宿ったもので、それがあなたのうちにも宿っていると私は確信しています。」(Ⅱテモテ1・5)

⑨テモテは幼い頃から聖書に親しんでいたとパウロから証言されています。

「けれどもあなたは、学んで確信したところにとどまっていなさい。あなたは自分がだれから学んだかを知っており、また、自分が幼いころから聖書に親しんできたこ

とも知っているからです。聖書はあなたに知恵を与えて、キリスト・イエスに対する信仰による救いを受けさせることができます。」(Ⅱテモテ3・14)

聖書における救いの契約は個人単位ではなく家族単位なのです。キリスト者の両親はそのことを自覚し、救いの契約の中に入れられている子どもたちが自覚的に救いを体験し、証しできるように祈り、導きましょう。片親がキリスト者であっても既に伴侶者も子どもたちも「聖い者」として救いの契約に入れられていること自覚し、祈り、導きましょう。家族の中で一人がキリスト者になった場合、既にその家族は救いの契約に入れられたことを覚え、家族の救いのため祈り、伝道しましょう。

聖書においては神の民のあらゆる集いに子どもの姿がありました。子どもたちは大人と分離されていなかったのです。それはどんなに微笑ましく楽しいことであつたでしょうか。大人も子どもと一緒に歌い、祈り、一緒に悲しみ、一緒に楽しむ。ここにこそ本当の神の民の共同体があることを知りましょう。

主イエスは常に子どもを愛し、子どもも主イエスと共に

にすることを喜びました。教会学校の教師はこの主イエスの御姿に倣おうではありませんか。あなたは子どもが大好きですか。子どももあなたが大好きですか。

聖書は次世代への宣教と信仰継承のため大人たちに子どもが聖書を学び、実践し、神の素晴らしいみわざを心にとめるように命じています。これこそが教会学校の働きであり、教会全体の使命であることを知りましょう。

それでは次回は、まず、聖書が語る次世代への信仰継承の命令や事例について学びます。子どもが聖書を学び、その教えに従うことをいかに聖書が重んじているかについてです。

次に、今私たちが具体的に取り組むべき課題についてです。そうです。家庭、教会学校、さらに教会全体における次世代への宣教と信仰継承の実践について学ぶことにしましょう。

(注、引用聖句は『新改訳2017』、太字は筆者)

# 聖書 出エジプト12・1～14 テーマ 過越

## 序論

(金井信生)

主がエジプトに下された十の災いの最後は、どんな身分の家庭も、また家畜も含めて、ういご（初子）が一晚のうちにみな死んでしまうというものでした。その結果、パロはついにイスラエル人を自由にしました。この出来事は、キリストの十字架によって罪と死の力から救われる予表です。

## 一、救いの時

これまでの災いを通して示されてきたように、主は災いを通してご自身の存在と力をあらわされました。人間が時におごり高ぶって何でもできるように思うことがあります。自然の力や社会の波を通して、無力さを知り、本当に確かなものや頼ることのできるお方を求めます。主がここで下された災いも、滅ぼすことが目的ではなく、主の声に聞き従う民を起こすためです。

最後の災いも、起ころうとする出来事と共に、どうす

れば免れることができるかを主は示されます。同じ出来事が、主を畏れ<sup>おそ</sup>ない者にとっては裁きの日、恐怖の日となり、主に従う者には救いの日となるのです。

かつて台風は突然来るものでしたが、今は予報が出ます。外れることもあります。知らされている方が幸いです。主の言葉は必ずその通りになるのですから、聞き従わなければ、自分から被害を受けることになります。

## 二、救いの条件

最後の災いは「主の過越」と呼ばれています。エジプトのすべてのういごを打たれた主が、イスラエルの民の家だけは、害を与えずに通り返されました。その区別は、家の中をのぞいたからでも、人の心を調べたからでもなく、家の入口の二つの柱ともいに血が塗られているかどうかだけでした。

家ごとに小羊が殺され、その血が戸口に塗られていきます。自分たちが守られるために、代わって犠牲となった小羊によって救いもたらされました。この一切は、主が示されたとおりに行ったからです。

出エジプトの際は、ういごだけが死ぬという災いでし

たが、私たち誰もが、最後は死ぬことにおいて、最大の災いを逃れることはできません。しかし、死ぬことに對しても、主が約束された条件を守り行えば救われます。罪を悔い改めてイエス・キリストの十字架の死を自分の罪のためと信じ、受け入れれば、私たちは死の恐れから解放されて、主に守られて生きる恵みをいただくことができますのです。

### 三、キリストの救い

小羊の犠牲によって、イスラエルの民は救われました。新約聖書は、イエス・キリストを「神の小羊」と繰り返し伝えていきます。洗礼者ヨハネは「見よ、世の罪を取り除く神の小羊」(ヨハネ1・29)と弟子に証します。ペテロは「きずも、しみもない小羊のようなキリストの尊い血」(1ペテロ1・19)によって、わたしたちはあがない出されたと記します。何よりもイエス自ら十字架にかけられる前の晩に弟子たちと食事を共にされ、ぶどう酒を「この杯は、あなたがたのために流すわたしの血で立てられる新しい契約である」(ルカ22・20)と宣言して渡されました。

私たちはきよい神の前に、本来ならば罪ある者、裁かれるべき者でした。しかし、神の独り子であり、全く罪のないイエス・キリストが、私を愛し、私の代わりに、命を差し出し死んでくださいました。私たちは、自分で用意した小羊ではなく、神が備えられた清い御子キリストの血によって、罪が赦され、救われました。キリストによる罪の赦しとは、神の前に、キリストの義が私の義となったことです。神は、イエス・キリストを信じ受け入れた私を前にして、<sup>①</sup>「わたしはその血を見て、あなたがたの所を過ぎ越すであらう。…あなたがたを滅ぼすことではないであらう」と宣言してくださるのです。

イスラエルの民は、今に至るまで毎年、この過越を記念する祭りを行っています。私たちはそれ以上に日々イエス様の十字架の救いを喜び感謝し、「キリストによって私は救われました」と、大胆に主の前に近づき、御名をほめたたえて歩みましょう。

### 結論

キリストの血により罪赦されたことを感謝し、神の裁きから守られていることを喜びましょう。

## 研究資料

(小平徳行)

過越の出来事はイスラエルの歴史においても、後のキリストによる救いの型を示している点においても非常に重要である。

## テキスト

2 この月をあなたがたの初めの月とし この出来事はイスラエルの歴史において非常に重要なものであったので、特別に霊的な意味において「初めの月」とする必要があった。日常の暦では、おそらく第七の月であったと思われるが、過越と出エジプトという重大な出来事を記念して、この日がイスラエルのために特別な意味を持つようになった。この時以来、イスラエル人は宗教暦と民事暦の二つの暦を用いるようになった。この月はまた「アビブの月」とも呼ばれる(出エジプト13・4、申命記16・1)。「アビブ」とは「穀物の穂」を意味し、この月にはちょうど穀物が穂を出す頃で、太陽暦の4月頃に相当する。バビロニア捕囚の後、この月はバビロニアの習慣に従って「ニサンの月」と呼ばれるようになった(ネヘミヤ2・1、エステル3・7)。

## 3 全会衆(ハ) コル・エーダー

イスラエルを表す宗教的用語。エーダーはカーハールと共に、新約における教会(ギ)エクレーシア)のもととなった用語。

小羊(ハ)セ) は羊または山羊の両者に用いることができる。それゆえ5節では「羊またはやぎのうちから、これを取らなければならぬ」と説明されている。

4 おのおの食べるところに応じて 後代になると、一頭の

小羊を食べる人の数は10人と定められるようになった。これはユダヤ教による人工的规定であって、実際にはそれぞれが食べられる分量に応じて人数と分量を定めればよかった。

## 5 傷のない(ハ)ターミム

この語はレビ記の祭儀律法の中で多く用いられており、身体に欠陥のないことを意味する。また、人についても用いられ、「全き人」、「全き者」と訳されている(創世記6・9、17・1)。この場合には「神に全く従う」という意味に用いられる。

過越の小羊はキリストの型で(1コリント5・7)、傷のない、完全無罪のキリストがその血を流されたことによつて贖<sup>あがな</sup>いが完成した。

7 その血を取り、…塗らなければならない この行為

は、ヒソブの束を用いて行われた(22)。ヒソブはきよめの行事に関連してのみ用いられる(レビ14・49・52)ので、この行為は、きよめと贖いの儀式に関連している。

8・10 ここは食事について具体的に指示されている。

**火に焼いて食べ** 生で食べることや、水で煮て食べることで禁じられている。生で食べることは、当時、古代の風習か、あるいは異邦人の魔術的な行為の中の風習として残っていたのかもしれない。水で煮ることを禁じているのは、イスラエルの各家庭には羊一頭を丸ごと煮ることの出来る大釜はなかったため、煮るために動物の体を小さく切ってしまうことがないようにという配慮だったかもしれない(46)。過越しの時に一つのパンから食するように(1コリント10・17)、小羊もその体のまま食卓に供された。それは主にある者が一つ心になって交わることができるようになるための象徴的な行為である。**種入れぬパン** パン種を入れたパンは腐敗しやすかった。それは道徳的腐敗を象徴しており、悪意と邪悪の型でもあったので(1コリント5・8)、ささげ物のパンはパン種を入れて作ることが禁じられた。**苦菜** エジプトにおける苦難を表したものの。「ミシユナー(ユダヤ教の中で

最も初期に成文化された口伝承)」には苦菜にする草として、チシャ(レタス)、キクチシャ(チコリー)、コシヨウグサ、ヘビノネ、タンポポの5種類が挙げられている。

11 **腰を引きからげ、足にくつをはき、手につえを取って、急いでそれを食べなければならぬ** いつでも出立できる身なりをして食するということで、緊迫した雰囲気がよく表されている。後代になると、自由の民であることを表すため、ゆつくりした雰囲気の中で食するようになった。**過越**(ヘペサハ) 文字通りには「跳躍する、飛び越す」を意味し、ここから「通り越す、容赦する」という意味をもつようになった。

13 **その血は：しるしとなり** 家の入口とかもいに塗った血が、神のさばきより免れるしるしとなったように、私たちも神と人の前にキリストの血に対する信仰を言い表わす時に救われる。

**参考図書** 西満「出エジプト記」『新聖書注解・旧約1』(いのちのことば社)、レオ・G・コックス「出エジプト記」『ウェスレアン聖書注解・旧約篇1』(イムマヌエル綜合伝道団)、安田吉三郎「出エジプト記」『実用聖書注解』(いのちのことば社) 他。

## 聖書

出エジプト12・1～14

## タイトル

神様に守られて歩もう

わたしはその血を見て、あなたがたの所

を過ぎ越すであらう。出エジプト12・13

## 目 標

キリストの血により罪赦され、神の裁きから守られる者となる。

## 導入

(飯田勝彦)

新しい年が始まりました。今年も神様の守りを体験しながら歩みましょう。

皆さんは、仲良しの友だちと喧嘩したことがありますか？ 仲が悪くなると何だか学校に行くのも嫌になることがあります。でも、素直に友だちに謝って赦してもらえると嬉しいですよ。人を愛することは、言葉を変えれば人を赦すことです。今日、神様が皆さんをどんなに愛してくださっているかが分かります。

## 苦しむイスラエル

神様はイスラエルを祝福され、どんどん人数が増え行きました。でも、彼らは長い間、エジプトで奴隷とされていました。ジリジリと太陽の照りつける中で、レン

ガ作りの強制労働をさせられていたのです。奴隷とは、誰かに支配され自由がなく、苦しみの中にいる人です。皆さんは、誰かの奴隷ではないにしても、罪の奴隷になっていないでしょうか。自分では「心の優しい人になりたい」とか「悪いことはしない」と思っているけれども、心の中ではいつも誰かの文句を言ったり、実際に友だちと一緒にになって悪いことをしたりしていませんか。自分ではしたくない悪いことをしているとすれば、それは罪の奴隷になっています。

## 救われたイスラエル

苦しむイスラエルの民を、神様は見放しておられませんでした。イスラエルの民を救うため、まずモーセを選ばれました。そしてモーセがエジプトの王パロの所に行って「私たちをこのエジプトから出してください」と願います。でも、パロはそう簡単に許してくれませんでした。パロはそれを聞いて、ますますイスラエルを苦しめるようになってのです。そんな中、神様はエジプトに対して、モーセを通じ、いなごやかえるの大群、病気などの災いを九回も与えました。それでも、パロは強情でイスラエルをエジプトから出ませんでした。最終的に神様は一



つのことをモーセに示されました。

神様はモーセに「真夜中ごろ、わたしはエジプトの中に行きます。その時、国中の初子や家畜の初子もみな死ぬであろう」と、大きな災いが起こることを伝えられました。もし、このままだとイスラエルの人々までも災いに会い死んでしまいます。でも、神様は、ちゃんとその逃げ道を示されたのです。それが過越と言われるものです。イスラエルの人々が、神様の言われるものを食べ、そして小羊の血を家の入口の二つの柱と、かもいに塗れば、神様はその血を見てその家に災いを与えることなく過ぎ越すと約束されたのです。神様が言われた災いが現実になりました。国中に悲しみの叫び声が響き渡りました。でも、神様の約束を実行したイスラエルの人たちだけは、災いから守られ、救われたのです。そして、その後エジプトから脱出することができました。

### 守ってくださいる神様

神様は、罪を嫌い、裁かれるお方です。もし、皆さんが罪の奴隷のままにいるなら、エジプト人が神様の災いに打たれたように、神様の裁きを受けなければなりません。でも、その裁きから守られ、救われる方法があります。

す。それがイエス様の十字架であり、イエス様の血です。イエス様の流された血は、私たちを罪の奴隷から解放する力があります。皆さんが罪を悔い改め、イエス様を救い主と信じるなら神様は、裁きを過ぎ越してくださいます。

龍二君は、以前、電車の運賃をごまかしたことがありました。ある時、教会学校で「皆さんには、告白していない罪、赦されていない罪はありませんか。神様はご存知ですよ」と語られました。すると、龍二君は、あの時のことを思い出し、心がとても重くなりました。そして、イエス様に正直に罪を悔い改め、イエス様の十字架の血は、自分の罪のためだったと信じて、イエス様に赦して頂きました。すると、龍二君の心は重苦しさから脱出できたのです。

### まとめ

神様は、愛するあなたを罪による裁きから守りたいとイエス様を与えてくださいました。イエス様を信じて、神様の大きな愛で守って頂きましょう。

♪じゅうじか わが力♪ (ホ115)



# 聖書 出エジプト14・10～27 テーマ 海を渡る

## 序論

(金井信生)

主がパロの心を碎かれて、意気揚々とエジプトを出発したイスラエルの民でしたが、たちまちその心はくじけてしまいました。またもパロが心を変えて、全軍をもってイスラエルの民を追わせたからです。しかし、すべては主のはからいでした。

## 一、海に導かれた主

エジプトの大軍が後を追ってきたことに気づいたとき、イスラエルの目の前には海が広がっており、逃げ場はありませんでした。この場所はエジプトからカナンの地に向かう最短コースではありません。イスラエルの人々は、主が導かれる道に進んできました。昼は雲の柱が現れ、夜は火の柱によって進みました。

つまり、海辺に導かれたことも、エジプトの大軍が後を追うことも、すべて主の計画の中にあつたのです。しかし、イスラエルの人々は、主への信頼をすぐに失ってしまいました。これまでも数々の不思議をもつて守ら

れ、救い出されてきたのに、ピンチに陥るとすぐに視野が狭くなり、恵みの記憶を失ってしまう私たちの姿そのものです。

人々の〈荒野で死ぬよりもエジプトびとに仕える方が、わたしたちにはよかったのです〉と叫ぶ声に、モーセは〈あなたがたは恐れてはならない。かたく立って、主がさよう、あなたがたのためになされる救を見なさい。…主があなたがたのために戦われるから、あなたがたは黙していなさい〉と答えました。背後の敵でも目の前の海でもなく、上を仰ぐ信仰に導く言葉です。

## 二、海を分けられた主

主はモーセに、〈あなたはつえを上げ、手を海の上にさし伸べてそれを分け、イスラエルの人々に海の中のかわいた地を行かせなさい〉と命じられました。モーセがその通りにすると、強い東風によって海の水は左右に分かれ、イスラエルの民は向こう岸に渡ることができました。そしてモーセが再び手を伸べると、水は戻り、追ってきたエジプトの軍勢を飲み込んでしまいました。

このくだりを見ると、主は大きな奇跡をおこなわれる一方、細かなところにも行き届いておられます。モーセ

になすべきこと、これから起こることを語られることは、すべてが主の御手に治められていることを示すためです。またこれまで先頭に立ってきた雲の柱は後ろに回って、エジプトの軍勢がイスラエルの人々に近づけないように守っていました。さらに、海の中にできた道を、イスラエルの人々は自分の足で前進しなければなりませんでした。

私たちも救われた生涯を歩み続ける者です。その時に主の恵みを注意深く見出していくときに、足取りは確かになります。また私たちに与えられている力を主の導きの中で用いていくことも必要です。

「救われた。：見た。：見た。：信じた」(30-31)とあるように、主の救いをしっかり見て、はっきり信じる者となるよう導かれているのです。

### 三、紅海を二つに分けられた者に感謝せよ

詩篇136篇は、主の創造と救いのみわざをたたえる賛美です。一つ一つのみわざをたたえるだけでなく、「そのいくつしみはとこしえに絶えることがない」と、今も私たちの上に変わることはない主の力と恵みが注がれていることをほめたたえています。

私たちは、この旧約の賛美に加えて、主イエス・キリストによる救いの恵みを感謝する者です。主が命じられると海の水が分かれ、道が開かれました。同じように主イエスが命じられると、墓の石が取りのけられて、死んだラザロが生き返って出てきます。そして主イエスご自身が十字架上で「すべてが終わった」と叫ばれると、私たちを苦しめ、縛り付けていた罪の鎖は解け、罪が赦されて永遠の命への道が開かれました。

時に行き詰まりをおぼえるときもあるでしょう。しかし主はあえてそこに私たちを導かれ、そこで主を仰ぎ、もう一度信仰に立ち帰らせようとしておられるのかもしれない。

いつも主を仰ぎ、すでに完成しているキリストの救いをほめたたえながら、どこに導かれても救いの道があることを喜びましょう。

### 結論

危機があります。しかし危機もまた神の救いの御計画の中にあり、私たちが神の守りと助けを経験し、なお主を賛美し、信頼して従う幸いに導くものであることをおぼえよう。

## 研究資料

(小平徳行)

背後に迫るエジプト軍と前方に立ちはだかる海に挟まれて、イスラエルは絶望的な状況に追い込まれた。しかし、これは神がご自身の栄光を表すために、許されたことであつた(8節)。危機は神の恵みと御力の表される機会である。

## テキスト

10〜12 パロが近寄つた時：非常に恐れた パロの軍隊を見た時のイスラエルの反応は、非常な恐れであつた。11〜12節にはイスラエルの人々の陥つたパニック状態と絶望感を表している。「荒野で死なせるために、わたしたちを携え出した」と不信仰は常に、神に照らして困難を解釈するのではなく、困難に照らして神を解釈するように誘う。この時イスラエルは、直前に過越を経験していたにもかかわらず、現実の状況だけによつて霊的状态が左右されていた。彼らがどのような中から救われたのか、神が過去にどのようなみわざをなして下さったのかという歴史的な考察に欠け、さらには神は何をなしてくださるかという神への深い信頼に基づく信仰も欠けてい

たのである。このような状態では、信仰は現在の状況に容易に動揺させられてしまう。困難が私たちの心と主との間に入り込む時にはいつでも、主のご臨在を楽しむことはできず、自分の困難の前に苦しんでしまうのである。信仰は、困難の背後に神がいますことを認め、神が、真実さ、愛、力のすべてをもつて共におられる事を知ることである。

13 かく立つて 試練に会つた時に信仰が最初にとる態度である。イスラエルの狼狽ろうばいに対してモーセの確信の姿は際立っている。彼は主がイスラエルを救われる事を確信していた。救を見なさい 救いとは神によつて完成され、啓示されたものであり、私たちが見て、喜ぶべきものである。

14 主があなたがたのために戦われる 申命記において繰り返し語られている(申命記1・30、3・22、20・4)。そこに常に共に言われているのは「恐れてはならない」ということである。恐れず主に信頼して進む時、主は私たちのために戦ってくださる。黙していなさい 信仰生活の大切な要素は、主に信頼し、主の前に静まり、耐え忍んで主を待ち望むことである。

15 あなたは、なぜわたしにむかって叫ぶのか 叫ぶの内容は記されていないが、モーセ自身の中にも動揺があったことを示しているのかもしれない。彼らを進み行かせなさい 恐れに満ちた祈りをやめ、信仰によって前進すべき時であった。

16 前進せよという命令と同時に、恵みによる助けも来た。神の御手は、私たちが第一歩を踏むために道を開いてくださる。

19 神の使 実際に人々の目に見えたかどうか知らないが、雲の柱が彼らの前から移り、彼らの後ろに行つたことによって表された。超自然的でありつつ、人格的な臨在によって神はイスラエルを守られた。

20 そこに雲とやみがあり 直訳すれば「そこに雲があり、暗やみがあつて夜を照らした」となる。通常、雲の柱は昼のために、夜は火の柱となるが（出エジプト13・21）、この日の夜は火の柱ではなく、光のない雲の柱がイスラエルの後方に移り、エジプト軍との間をふさいだ。この柱はエジプト軍には暗やみをもたらしたが、イスラエルには光であった。

21 強い東風 東風は強風の代名詞であろう。これは超

自然的な風であり、東から吹いてきたわけではないと主張する人もいる（J・J・デーヴィス）。この風の結果、海は陸地となるが、22節のように水が「右と左にかきとつた」現象を説明することは難しい。さらに、このように海の水を二分するほどの強風の中をイスラエルの人々が行進することができたというのは不思議なことである。

24 暁の更あかつき 夜を三更に分けた場合、これは2～6時に当たる。

25 輪をきしらせて 新改訳2017、聖書協会共同訳では「車輪を外し」となっており、こちらの方がヘブル語の原意を伝えている。主が彼らのためにエジプトびとと戦う エジプトの兵士たちは、ここで起きた出来事の中に、神の力を認めた。

26～27 エジプト軍は、イスラエルの人々の進んだ道を歩むことはできなかった。神がご自身の民に歩むように命じておられる道は、肉では決して歩めない道である（Iコリント15・50）。信仰のみが私たちに神の道を歩ませることができるのである。

参考図書 1月5日分の他、C・Hマッキントシ『出エジプト記講義』（伝道出版社）。

## 聖書

出エジプト14・10～27

## タイトル

神様、助けてください！

## 暗唱聖句

かたく立って、主がきょう、あなたがたのためになされる救を見なさい。

出エジプト14・13

## 目標

難しい状況の中でも助けてくださる神を信頼する。

## 導入

(飯田勝彦)

「あーあ、どうしようかなー」、皆さんは今、何か悩んでいることや困っていることは、ありませんか。毎日を過ごしていると、思いがけないことがたくさん起こります。そんな時、心が暗くなため息を付いたり、何もやる気が起こらなくなったりすることがあります。元気な時やすべてが上手く行っている時には、神様のことを思い出しても、苦しくなると逆に神様のことを思い出せないことがありますか？イスラエルの人たちもそうでした。

## もう、ダメだ！

イスラエルの民は、奴隷として苦しめられていたエジ

プトから脱出することができました。神様は、そのために超越するという素晴らしい御業をされましたね。彼らはモーセをリーダーとして神様の約束されたカナンの地を目指して進んで行きました。そして、主がモーセに言われた場所で宿営したのです。そこは海に面したところでした。イスラエルの民は、急いでエジプトから出て来たので、ここで一息入れることが出来たでしょう。

すると「ドォー！」という地響きが聞こえて来ました。

「何だ何だ、地震か」と思い、ふと後ろを振り向くと何とエジプト軍が追いかけて来ていたのです。びっくりしたイスラエルの民は、いざ逃げようと思いますが、前は海で行き止まりです。「もうダメだ！」と皆が思ったでしょう。皆さんも今までに「もうダメ」と落ち込んだり、あきらめたりしたことがありますか。私たちの生活にはこのようなことが何回も起こります。でも大丈夫です。神様は不思議なように皆さんを守ってくださいます。

## 神様は、助けてくださる！

絶体絶命の中、イスラエルが言った言葉は「神様助けて！」ではありませんでした。彼らは、神様に対する思いをモーセに対してぶつけました。それは不平不満でし

1月

# 12日 礼拝メッセージ例

た。「エジプトには、俺たちの墓がないから、あえてここで死なせるために、エジプトから連れ出したのですか？」皆さんなら何と言いますか？

イスラエルは、エジプトでも災いから何度も守られて来ました。そして、いつも雲の柱や火の柱によって、神様が共にいることを知ることができていました。それなのに、いざという時、神様に助けを求めることができなかったのです。

でも、民の不満を聞いたモーセは、さすが神様から召されたリーダーです。彼は慌てることなく「落ち着きなさい。今日、神様は必ずあなたたちを救ってくださる！」と言いました。モーセは、「神様は、助けてくださる！」と確信していたのです。

## 神様、感謝します！

絶体絶命の中、神様はどのようにイスラエルを助けてくださったでしょうか。神様はモーセに「杖を上げ、手を海に向かって差し伸べると海が分かれ、そこを渡ることができると言われました。「えっ、そんなこと！」と思うでしょう。でも、モーセは神様の言葉を信じて実践しました。するとどうでしょう。「ゴォー」と強い風

が吹き始め、海は2つに分かれたのです。そして、イスラエルは皆、分かれた海を渡り、向こう岸に着くことができました。エジプト軍は、後を追って海を渡り始めました。でも、モーセはもう一度、手を海に差し伸べたところ、海の水はもとに戻り、エジプト軍はみな死んでしまったのです。イスラエルの民は、絶体絶命のところから救われました。民は、モーセが言った通りに神の助けを体験したのです。

このことによって、民は主を恐れ、主とモーセを信じるようになりました。そして感謝の歌を神様にささげました。

## まとめ

イスラエルをあざやかに救われた神様は、皆さんと共におられる神様と一緒です。そして、どんな時にも神様は皆さんを助けてくださいます。それは、私たちが考えられないような方法でなされる場合もあります。ですから、もし苦しいことがあれば神様を信じ「神様、助けてください」と叫んでください。その叫びは、必ず「神様、助けてくださり感謝します！」に変えられます。

♪歌いつづけよう主のあいを♪(ホ77)



# 聖書 出エジプト16・31〜36 テーマ 荒野で与えられた食物

## 序論

(石田高保)

荒野でマナの降った出来事は、神が天の父として神の子どもである私たちを、見えるところ見えないところでどんなに配慮しておられるかを見ることができます。

## 一、からだへの配慮

イスラエルは神への不従順のために荒野で40年間過ごすことを余儀なくされました。それはあまりに厳しすぎると思われる処置ですが、その一方で神はイスラエルの民およそ二百万人を毎日養って気遣うことを忘れませんでした。パレスチナやシナイ半島の荒野は乾燥が激しく、草木も生えない世界が延々と続いています。農耕など思いもありません。そういう環境で生き延びられるのはわずかな人間と家畜だけでした。とうてい二百万人のイスラエルが数日でも生き延びるのは不可能です。しかしそれを可能にしたのは神のご配慮以外あり得ません。彼らはみずからの不従順の実を刈り取るようにして荒野で40年間さまよったわけですが、神は彼らを憐れんで飢

えることがないようにマナを降らせて下さいました。

そもそも神がマナを降らせることになったきっかけは、エジプトを出て2か月半目、荒野でひどい思いをするくらいならエジプトで死んだほうがよかったと不平を募らせたことでした(3)。その時から神は夕方にはうずらを呼び寄せ、朝にはマナを降らせ、一日でも飢えることがないようにし、それをカナンの地に入るまで続かせました。神は6日間マナを降らせ、6日目には7日目の分と一緒に2日分降らせ、7日目には降らせませんでした。それは7日目が安息日で、マナを集めるという労働も休まなければならなかったからです。ですからその日に集めようとしても見つけることはできませんでした。また沢山集めた者も、少ししか集められなかった者も、家族で分け合ったら全員満腹しました。

ここには私たち神の子どもを一日も欠かさず養おうという天の父の姿を見ます。私たちは肉体的にも物質的にも完全に神に依存しています。マナもうずらも民が努力したから得られたのでは決してありません。文字どおり天から降ってきたものです。私たちの口にする食物も、人の手を経ているとはいえ、元をたざせば天から降って

きたものと言えます。神は私たちの霊のことばかりではなく、からだのこと、物質的なこと、生活全般にわたって深く配慮しておられます。

## 二、霊への配慮

イエス様は「わたしが命のパンである。わたしに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決してかわくことがない」(ヨハネ6・35)と断言されました。これはマナの箇所に対する最高の注解です。イスラエルに降ったマナは実際の食べ物ですが、イエス様自身は天から下ってきて、この世に命を与える神のパンです。天からのマナ、神のパンとは何でしょうか。それはみ言葉なるイエス様ご自身のことです。これを食べるといふことは、イエス様を心の拠り所とし、イエス様に聴いて従ってゆくことを意味します。具体的には説教や聖書通読によってみ言葉を自分の生活に当てはめることです。また聴くだけで終わらないために、ほかのクリスチャンとみ言葉を分かち合って生活に適用するという責任を負い合うことでもあります。

神は私たちのからだのことだけでなく、私たちの霊について深く配慮しておられます。「人はパンだけで生き

るものではなく、神の口から出る一つ一つの言で生きるものである」(マタイ4・4)とは、み言葉キリストを食べることによって、私たちが未信者の世界で世の光、地の塩という主の力ある証人として生きるためにほかありません。自分の養われることばかりを求めている是十分ではありません。自分が養われつつ、他のクリスチャンや未信者の人を養うことが神の目的です。みことばを聴いたり学んだりするだけではなく、それを家庭や職場や学校や地域社会で実践するならば、私たちは自分のものではない神の国の影響力を及ぼすことができます。まずは自分がクリスチャンであることをできるだけ早いうちにカミングアウトしましょう。そして聖書の価値観を語り合う中でお分かちしましょう。そうすればこの世にはない別の世界の雰囲気ひきつけられる人が起こされてきます。人々は神なき荒野の世界で神の国のマナを潜在的に求めているのです。

## 結論

神は天の父として私たちを養わないではおれない方であることを当てにして、いっさいの必要を祈り求めてゆきましょう。そして神の言葉で生きてゆきましょう。



## 研究資料

(宮澤清志)

本年より、モーセの生涯を追いつながらの礼拝が続いている。本日の箇所は、食料（マナ）と信仰に関わる出来事である。というより本章全体が食料と信仰とに関わる事柄である。

新聖書大辞典は、この章の物語のもつ意味を

(1) イスラエルの大群衆の食用に足るほどの大量であったこと。

(2) 採集した分量が奇跡的に均等であったこと(16・18)。

(3) 安息日の分(その前日に集められた2日分の量)は腐敗しなかったこと(16・23)。

(4) その1オメルは「あかしの箱の前」に置かれて永久保存に耐えたこと(16・33)。

とまとめている。

さて、マナについてはむしろ14〜30節の方が詳細に述べられている。では、31節以降の物語の中心点は何か。それは、この経験が、イスラエルの民にとっては「記念」とされるべきであるということにある。14〜30節が、マナの出来事そのものに重点が置かれたのに対して、この

箇所は、主は40年に渡ってイスラエルの民を養い、更に主の臨在のあるところどこにおいても主は私たちを養い続けて下さることが語られるのである。

なお、イエスは肉体の食物としてのマナの限界性を示し、ご自身を「天から下ってきた生きたパン」と語られ(ヨハネ6・49) たことも、同時に黙想しておきたい。

## テキスト

31 詳細については13〜21節にも記されているので、そちらを併せてお読み頂きたい。また民数記11・4〜9にも関連した記事がある。そちらにも目を通していただきたい。マナ ヘブル語は「マン」であるが、「マナ」とは、七十人訳聖書に由来している。マナの起源については明らかではないが、語源的な説明では、「これはなんであろう」(16・15) からきたとされている。この言葉は、同時に「これはマナである」と訳すこともできる言葉である。後のイスラエルの人々は、このマナを知らなかった。そのため、入念な描写がなされているのであろう。コエンドロ セリ科の植物で、初夏に白い花をつける。香辛料としても広く用いられている。エジプトでは、コエン

ドロの種も用いていたので、イスラエルの民もよく知っていたことであろう。

これらの特徴から、「マナ」は、アラビア語の「マン」とおおよそ結論づけられている。これは、ぎりぎりの樹に生息する虫が出す排出物ではないかと推測されている。今日でも、6月盛夏には、ひとりで一日1kg集めることができるという。しかし、その実際の特徴が何であれ、神はこの不思議な出来事を、荒野を放浪した全期間、イスラエルの民に与えられたことを私たちは感動をもつて伝えたい。

**32** イスラエルの民は、神が不思議な方法で、彼らを荒野の旅の間で養われ、導かれたことを記念し、覚えるために、このマナをつぼに入れて保存するようにと命じられたのである。この荒野の旅は、神の恵みによってエジプトでの奴隷状態から救い出され、約束の地カナンへと導かれた旅であった。

**32 オメル** 「麦の一束」の意味で、1束の脱穀量から来た固体量の単位。1エパの10分の1（36節）で、約2.2リットル。日本の一升ますのように、各家庭にはその容器があった。

**33 つぼ** ここだけに用いられている言葉である。聖所について述べられているヘブル9・4には、このつぼを「金のつぼ」と記述しているが、これは七十人訳聖書によるものである。実際にこのつぼが金であったかどうかは定かではない。**主の前に** 具体的には「あかしの箱の前に」（34）ということ。この場所における目的は、未来の子孫のために保存されるということであった（32）。この、主の前に置かれた一日分の1オメルのマナは、永久に腐ることはなかった。

**34 あかしの箱** 神の意志を表現するものとしての十戒（あかしの板）を納めてあったためにこの名が付けられた。シナイ山で、主がイスラエルの民との間に結ばれた契約を思い出させるしるし、あかしの品として、モーセに与えられたものである。

**35** 神は、イスラエルの人々がカナンの地にはいるまでの40年にわたって民の必要に応じてマナを不思議な方法で与え続けた。これは、驚くべき神の奇跡である。

**参考図書** R・アラン・コール『ティンデル聖書注解「出エジプト記」（いのちのことば社）他

## 聖書

出エジプト16・31〜36

## タイトル

荒野で与えられた食物

## 暗唱聖句

イスラエルの人々は人の住む地に着くまで四十年の間マナを食べた。

出エジプト16・35

## 目標

神による養いと守りがあることに信頼して生きる。

## 導入

(土屋開夫)

新しい年がはじまりましたね。今年も教会学校に毎週来て、イエス様をしっかりと信じて歩みましょうね。

今年の最初は、出エジプトのお話を聞いていますね。このお話は、今から何千年も前の遠い昔話に思えるかも知れません。でも実は出エジプトのお話は、今、イエス様を信じて生きる私たちにも、ピッタリとあてはまるお話なのです！

## 出エジプト記は、信仰生活のお話

ちょっと思い出してみましょう。先々週は、神様がエジプトの人たちに「十の災い」を下された場面でした。その十番目の災いの時、イスラエルの人たちは家の入口

に小羊の赤い血を塗りましたね。その赤い血によって、「死の災い」がイスラエルの人たちの家を過ぎ越して、死から守られました。

この事は「イエス様が私たちの罪の身代わりの小羊として十字架で赤い血を流してくださいました事・・・そして、このイエス様を心にハッキリ信じる事によって、死ぬことのない永遠の命が与えられる事」を象徴しています。

そして先週は、神様のスゴイ奇跡によって、イスラエルの人たちは海の真ん中を渡りましたね。これは私たちがイエス様を心に信じた後、水で洗礼を受ける事を象徴しています。

イエス様を心に信じて、洗礼を受けて、これからいよいよ神様と共に歩む「信仰生活」が始まるのです！

## 信仰の旅に必要なもの

さあ、イスラエルの人たちは「約束の地(カナン)」を目指す旅が始まりました。私たちも、「約束の天国(神の国)」を目指して旅をしているのですよ。

ところで、旅をするためには、何が必要でしょうか？ 遠足に行く時のことを考えてみてください。何が必要ですか？ そう、何と言ってもお弁当！（そして水筒も。）

1月

# 19日 礼拝メッセージ例

お腹が空いたら歩けないもんね。

イスラエルの人たちは既に何十日も歩き続けていました。ろくに食べ物を食べていません。「もうお腹が減って死にそうだー」とみんな口々につぶやきました。

その時、神様は「見よ、わたしはあなたがたのために、天からパンを降らせよう。民は出て日々の分を日ごとに集めなければならない。」(16・4)と言われました。

毎朝、うつつら雪が降ったように、白い粉が地面の上にあります。それを集めて焼くと甘いビスケットのようでした。皆はそれを「マナ」と呼びました。

今も森永製菓の「マンナ」というビスケットが売っていますが、これはクリスチャンの森永太一郎さんがこの「マナ」にちなんで名付け、幼な子のために栄養満点のお菓子を作ったのだそうです。

## 信仰の旅に必要なもの

そのようにして父なる神様は、イスラエルの人たちが旅を元気に続けられるように、天からのパンを与え続けて下さいました。

さて父なる神様は、今の私たちも「天国を目指す旅、イエス様に従い続ける旅」が元気に続けられるように、

マナのように「天からのパン」を与えてくださっています！それが何だか分かりますか？

三択にしましょう。①マナじゃなくてバナナ、②なま食パン、③聖書のみ言葉。ハイ、正解は③です。

そうです、この「聖書」はマナよりもっと不思議な、神様からの「心のパン」です！ 私たちが生きていくためには、体のためのパンやごはんも必要ですけども、それ以上に「心のためのパン」が絶対に必要なんです。それが、神様が与えてくださった「聖書」です。これを毎日、一口ずつ食べる（読む）ことによって、不思議に心に生きるための栄養が与えられるのです。きっと神様の愛がものすごく詰まっているからでしょう。ビタミンI（愛）がたっぷりなのです！

## まとめ

日曜日に覚えるみ言葉は勿論のこと、ぜひ毎日「こども聖書日課」を学校に行く前に読んでみて下さい。毎日み言葉を食べれば、天国に行くまでずっと歩き続けることができますよ！

♪歩こうイエスの道を♪(PW15、イン81)

# 聖書 出エジプト17・8～16 テーマ 祈りの手

## 序論

(石田高保)

アマレクとの戦いは、クリスチャンにとって霊的戦いと解釈することができます。その相手は人間ではなく、悪の霊に対する戦いです(エペソ6・12)。その備えとして神の武具で身を固めるように命じられていますが、その最後に祈りが強調されています。

## 一、霊的戦いの必要

イスラエルにとって初めての戦争です。出エジプトの際、エジプト軍と戦争したとは言えません。なぜなら神がエジプト軍と戦われるのを傍観していただけだったからです。また出エジプトの際、ペリシテとの戦争も回避されました。まだイスラエルには戦う訓練ができていなかったからです。しかしこのたび神はアマレクがイスラエルを襲うのを許され、イスラエルは戦うようにチャレンジを受けました。それはイスラエルもやがてカナンの人と戦って、約束の土地を勝ち取るために慣らしておくなければならなかったからでしょう。当時の容赦ない弱

肉強食の世界で生き残るためには神の民も戦争によって強くなる必要がありました。またイスラエルは荒野で水のことや食料のことで不平不満をたびたび募らせ、モーセと神に食って掛かることをなかなかやめようともしませんでした。このようなときアマレクが襲ってきたことは、イスラエルにとっては降って湧いたような災難です。しかしアマレクとの戦争はイスラエルが自己愛的消費者マインドとも言うべき幼い状態から、自立した大人の民として、貢献者として変えられるためにも必要だったのかもしれません。私たちも試練が来ると祈りに真剣度が増し、よりリアルなものとなるのではないのでしょうか。「順境の日には楽しめ。逆境の日には考えよ」(伝道7・14)。

## 二、霊的戦いの実際

イスラエルはアマレクが襲ってきたためにやむなく受けて立つわけですが、モーセの立てた戦術は、ヨシユアを総大将にし、自分は神のつえを取ってアロンとホルを連れて丘の頂に登り、祈りに専念することでした。そしてアロンとホルはモーセの手が下がらないように支え続けます。それはモーセの手が下がるとアマレクが勝ち、上がるとイスラエルが勝ったからです。実に奇想天外な

戦術です。古今東西、まず見ることでできない兵法でしょう。背後の祈りによって戦争の勝敗が決せられるとは。見えない神のお働きを見えるように知ることのできる故事です。

翻ひるがえつて

私たちの霊的戦いはどうでしょうか。無勝流という剣術もありますが、武道であればたいい型から入るものです。祈りにおいてもいちおうの型はありますが、だんだんに自分の体質に合った型をつくればよいでしょう。特に霊的戦いのための祈り、つまり誘惑に打ち勝つための祈りは、誘惑に弱い霊の領域を見極めることから始まります。悪魔に付け入る機会を与えてはいないか。依存症的な習慣はないか。誰かを赦さないでいることはないか。密かに誰かの不幸を願っていることはないか。誰かに怒りを燃やし続けていることはないか、など。そのままにしておく悪魔の狙う間隙かんげきをつくってしまいます。それを見極めたら正直に神に告白しましょう。そして自分の力では克服できませんから、助けてくださいと祈りましょう。さらにそれを十字架につけて手放す祈りをしましょう。

またアロンとホルがモーセの祈りを助けたとあるよう

に、祈りは個人的なものだけではなく、相互依存的なものでもあることも覚えたい。つまり他のクリスチャンに遠慮なく祈ってもらうこと、祈りをリクエストすることです。それは神の家族として自然な姿でもあります。神は私たちが自分ひとりだけで成功することを計画しておられないようです。大伝道者パウロでさえ、「大胆に福音の奥義を明らかに示しうるように、わたしのためにも祈ってほしい」(エペソ6・19)とエペソのクリスチャンたちに謙遜に要請しています。

また誰かと罪の告白をし合うことも霊的な戦いに効果的力があります。「互に罪を告白し合い、また、いやされるようにお互いのために祈りなさい」(ヤコブ5・16)とあるように、伴侶や親子、同性の友人などに自分の罪の告白のできる相手を持つならば、依存症的な習慣を克服しやすくなるというものです。

### 結論

クリスチャンライフを生き生きと送るためには、自分ひとりでは十分ではなく、必ずクリストのからだである他のクリスチャンとの交わりを必要とします。特に祈り合うことによって霊的戦いに打ち勝ってゆきましょう。



## 研究資料

(宮澤清志)

## テキスト

8 アマレク アマレクはエサウの孫にその源を発する民であり(創世記36・12)、非常に好戦的な遊牧民である。この部族は、シナイ半島のカデシユの地に住んでいたといわれている。レピデム 荒野におけるイスラエル人の宿营地のひとつ。

9 この節で語られるモーセの言葉によると、アマレクと戦ったイスラエルの軍隊は、職業的軍人ではなく、この戦いのために特別に選ばれた軍隊だったようである。そしてヨシユアはそのイスラエル急造軍を指揮する責任を任された。一方のアマレクは、非常に好戦的な民族であった。ヨシユア 聖書の中で、ヨシユアという名が記されるのはここが最初である。実際にはこの時の名は「ヨシユア」ではなく「ホセア」だったようである(民数記13・16)。いずれも名の意味は「主は救い」であり、ギリシャ語では「イエス」となる。出てアマレクと戦いなさい モーセは前回イスラエルのつぶやきに対して、主に叫ぶことによって解決した(17・4)。しかし今回は

ヨシユアに直接命じている。神のつえ この章(17章)における鍵の言葉のひとつである。このつえは出エジプトにおいても神の裁きの道具として用いられ(7・20、8・5他)、また渴きを潤す水を出す道具としても用いられた(17・6)。いわば神の力の象徴である。このつえの意味する神ご自身の臨在と、ヨシユアをはじめとする人間の服従とが、この奇跡の肝である。

10 ホル 歴史家ヨセフスは、この人物をモーセの姉ミリヤムの夫としているが、定かではない。この人物は、この箇所その他にはモーセがシナイ山に登っている間、モーセにかわって民を監督した(出エジプト24・14)という記録が残っている。

11-12 谷間での戦いの模様が簡潔に描かれている。しかし、出エジプト記の著者の関心は、戦いそのものではなく、あくまでもモーセの挙動に集中して描かれている。直接アマレクと戦って勝利を得たのはヨシユアであるが、勝利を決定したのはモーセを通して働かれた神ご自身であった。ここで、古来このモーセの行為が何を意味するかが問われてきた。まず、イスラエルの民に対しては主の旗印を高く掲げることを意味していると考えるこ

とができる。この考えは、特にモーセが握っている神のつえ(9)あるいは15節の言葉との関連において語られる。もう一つは両手を挙げて祈ることを意味する。ダビデは、「私は生きているかぎり、…両手を上げて祈ります」(新改訳 詩篇63・4)と告白している。

しかし、ここでもう一つ私たちが考えるべきことは、この奇跡における神の介入の仕方である。神は、イスラエルとアマレクが戦うに際し、具体的には何も語られなかった。ここでモーセは、自らに与えられた最大の武器をもってアマレクに立ち向かったのである。すなわち、それが神のつえ(信仰)であり、また執り成しの祈りだったのである。

12 既に齢80を越えたモーセにとって、この行為は疲れを伴うものであったに違いない。当然一日中両手をあげ続けることはできない。そこでアロンとホルが、両手をあげるモーセを支えるために必要であった。そしてその援助をモーセも快く受けたことであろう。日本人は、とにかく援助を受けることにある種のためらいを覚えることが少なくない。しかし、同労者の助けを受けることを決して恥じてはならないのである。

14 この戦いの勝利は、イスラエルにとっては非常に重要な経験であったことは言うまでもない。それゆえ主はこの出来事を後生に伝えさせるために、この勝利を書物に記すこととそれを語り伝えさせることを求めた。これを書物にするして この指示は、イスラエルの伝承の中で特異なものである。イスラエルは「主の戦いの書」をもっていたといわれている(民数記21・14)。あるいは何らかの旅の記録をつけていたようである(同33・2)。このような記録がイスラエルの民を励ます役割を担ったことは想像できる。耳に入れなさい 「読んで聞かせよ」(新改訳)。この出来事を語り継がせるためであろう。

15 モーセはアマレクに対する勝利を記念して、祭壇を築き、それに「主はわが旗」という名を付けた。主がイスラエルのために戦われたことを感謝するためであった。

16 主の旗にむかって手を上げる 「旗」は、新改訳と新共同訳では「御座」と訳されている。いずれにしてもその意味するところは、右手を主の臨在の象徴である祭壇(あるいは旗)の上に置き、主の戦士のひとりとして、主に対して自らをささげるということである。

参考図書 1月19日分と同じ。



## 聖書

出エジプト17・8～16

## タイトル

祈りの手

## 暗唱聖句

モーセが手を上げているとイスラエルは勝ち、手を下げるとアマレクが勝った。

出エジプト17・11

## 目標

御国のための戦いにおける祈りの重要性を知って、祈る者となる。

## 導入

(土屋開夫)

一月は、出エジプト記を開いています。イスラエルの人たちがエジプトでの奴隷から救われて、約束の地を目指すストーリーは、罪から救われて天国を目指す私たちのストーリーと、とてもよく似ています。

さて、その天国を目指す「信仰の旅」で、とっても大事なものが二つあります。

一つは先週学んだ「天からのパン（マナ）」、聖書の言葉です。そして二つめは今日学ぶ「お祈り」です。

「み言葉」と「お祈り」、この二つはちょうど自転車の前輪と後輪のように無くてはならないものです。

(前輪は進む方向を導き、後輪は進む力を与えます。)

## 「お祈り」とは

さて、「お祈り」というのは、父なる神様にお話することです。皆さんがお父さんに話すように、親しく何でも祈ればいいのです。でも、特に必死に祈ることが必要な時があります！ それはピンチの時です。「お父さん、助けて！」と。「信仰の旅」というのは、そういうピンチや戦いの時が結構あります。でも大丈夫。そのためにこそ「お祈り」があるのです！

## 戦い

旅を続けるイスラエルの人たちにも、早速ピンチがありました。アマレク人たちが旅の行く手を邪魔し、戦いをしかけてきたのです！

(旧約時代は、イスラエルは敵と戦う事がありました。けれどもイエス様が来られてからの新約時代では、人を敵として戦う事はしません。)

ずっと奴隷だったイスラエルの人たちは、戦い(実戦)などしたことはありません。きつと相手の方が戦い慣れていて、強い武器も持っていたかも知れません。どう考えても勝つのは難しい状況です。

けれども大丈夫！ こっちには、この天地を造られ、

支配しておられる、本当の神様がっているからです！  
「お祈り」とは、私たちには出来ないような難しい事でも神様には出来る、と信頼してお願いすることです！

ヨシユアさん達が敵と戦っている間、モーセさんは手を天に挙げて（たぶん両手）、イスラエルが勝つように神様に必死に祈りました。何時間も祈り続けました。

するとだんだん祈り疲れてきました。「ちよつと休憩……」と思つて祈りをやめると、敵が勝つてきました。「いかん、いかん」と思つて、また慌てて祈り始めるとイスラエルが勝つてきました。アロンさんとホルさんが右と左で手を支えたので、モーセさんは最後まで祈り通すことが出来ました。一人で祈るより、二人、三人で祈る方がよく祈ることが出来るのです。

そうして、遂にイスラエルが勝利しました！

### 信じて祈る

皆さん！ 今日のお話を、昔話を聞くように「へー……」と聞いてはいけませんよ。これは真実の話です！  
つまり「お祈り」というものは、なんとなく、テキトーに、口先だけで祈ってはいけませんのです。「お祈り」は信じて祈らなければ、全く意味がありません。

イエス様は「お祈り」について繰り返し、繰り返し、教えられました。「あなたがたに言うが、なんでも祈り求めることは、すでにかなえられたと信じなさい。そうすれば、そのとおりになるであろう。」（マルコ11・24）  
「父なる神様の御心ならば、この祈りはどんなに難しくても、必ずかなえられる！」と、不可能を可能に出来る神様を信じて祈ることです！それが非常に重要です。

先生もある時から、自分の祈りが不信仰だったことを悔い改めて、「信じます！」と告白するように力を込めて祈るようにしました。そうすると色んな祈りがどんなにかなえられるようになりました。ピンチは乗り越え、心に元氣のない人は元氣になりました。

### まとめ

信仰の旅にはピンチや戦いもありますが、みんなの事をものすごく愛しておられる、お父様である神様に祈れるのですから、大丈夫です！もつともつと信じて、どんどん祈り続けましょう！

♪明日に向かいチャレンジ♪（PW58）

# 聖書 ヨハネ12・1～8 テーマ ナルドの香油

序論

(小泉 創)

過ぎ越しの祭りの六日前、イエスが十字架におかかりになる日が近づいています。マルタ、マリヤ、ラザロの姉弟がいるベタニヤで夕食のときがもたれました。そこでマリヤは歴史に残るささげものをしたのです。

## 一、惜しみなくささげる者

マリヤは高価で純粋なナルドの香油をイエスの足にぬり、自分の髪の毛で拭き始めました。それはおよそ一年分の給料を残らず必要とするような価値のものでした。有り余る中からのものではなかったはずです。マリヤはイエスに対して精一杯のささげものをしました。彼女にとってみれば、兄弟ラザロをよみがえらせてくださったイエスにどんなに感謝したとしても足りない思いであつたに違いありません。それはイエスが与えてくださった恵みに対する、マリヤの精一杯の応答でした。別の福音書では、このことは後世まで語り継がれると言わ

れています。ゴルゴダのやみが近づく中に、一瞬よぎる、神を愛する美しい光景です。神の御子をねたみ、引きずりおろそうとする者たちがいる一方で、神のひとり子を愛しささげつくす姿が、イエスの前にひざまずき、ナルドの香油を注ぐマリヤにあらわれています。私たちの神へのささげものも、イエスの愛に応答して惜しみなくささげるものでありたいものです。

## 二、惜しみなくささげる者

この大切な場所に同席し、愛と献身に満ちた美しい場面を見ながらも、冷たい心で批判する者がいました。十二弟子のひとり、イスカリオテのユダです。高価なこの香油を売れば、貧しい人たちに施せたのに何ともつたないことをしたのか、なんと愚かなことかとあざわらったのです。ユダはそれほど慈悲深く、貧しい者たちに寄り添っていたのでしょうか。仲間の弟子たちも知りませんでした。ユダは実には貪るものであり、盗む者でした。イエス一行の会計係をまかされながら、それをごまかして自分の懐に入れるようなことをしていました。ユダの一見、道理にかなった立派な意見も、実はマリヤのささ

げたものを自分のものにしたかったという貪りの心からでてきていたのかもしれない。

私たちが神にささげようとするときにも、このような打算的な声を聞くことがありますか。もつと自分のために使えばよいのに、他のことのために用いたほうが良いのに、今でなくても良いのに、とささげようとする思いをくじくような声です。

人が神に従う道を妨げるものは多々ありますが、お金の問題もその一つです。神と富とに兼ね仕えることはできない、一方を憎んで他方を愛することになる、とイエスも弟子たちに教えられました（マタイ6・24）。お金は神への愛の応答として用いることもできますし、神から引き離すものにもなります。

### 三、時をとらえる

イエスはユダをとどめ、マリヤのささげた精一杯のささげものを喜んで受け取られました。イエスはマリヤが葬りの日のためにその香油をとっておいてくれた、と語られました。マリヤはイエスの語られる言葉に耳を傾けてきました。十字架の預言も心にとめていたことでしょ

う。イエスが十字架におかかりになる前にイエスにおささげできるのは、本当に限られたわずかな期間しかありませんでした。マリヤはすべての人の代表のようにして、十字架の道を歩もうとしておられる主イエスに精一杯のささげもの、時をとらえたささげものをしたのです。私たちにもささげるべき時があります。それはいつかそのうちに、ということではありませんし、金銭やものだけのことでもありません。私たちの時間も、生涯も、今、イエスに喜んでおささげしましょう。

### 結論

私たちへの愛のゆえに、主イエスは十字架の上ですべてを投げ打ってくださいました。マリヤがイエスの愛に応えたように、私たちも時をとらえて主によきものをおささげしましょう。

## 研究資料

(辻林和己)

宗教指導者たちは、イエスの運動が暴動へと発展し、そのためローマ軍が介入して、自分たちの立場が危うくなることを恐れた(11・48)。そして、主イエスを殺害する相談をする(11・53)。今回の個所は、主イエスに対してマリヤのしたこと。それに応じてのイスカリオテのユダの言葉と主イエスの言葉が記されている(並行個所は、マタイ26・6～13、マルコ14・3～9)。

## テキスト

1 ベタニヤに行かれた それまでは弟子たちとエフライムに滞在しておられた(11・54)。ラザロのいた所 ラザロは姉妹であるマルタ、マリヤの弟。ベタニヤには、三人が共に暮らす家があり、主イエスは弟子たちと共にそこに滞在された(11・1～2)。

2 ラザロも加わっていた 主がラザロをよみがえらされたこと(11・38～44)は、ユダヤの多くの人たちに伝わっていた(12・11)。

3 その時、マリヤは 主イエスはマリヤたちとかねて

より親しくしておられた。マリヤは主イエスの語られるみ言葉に熱心に耳を傾ける人であり(ルカ10・39)、主がラザロをよみがえらされた出来事をそばで目撃した人であった(ヨハネ11・32参照)。彼女は、主イエスを信じ(ヨハネ11・25～27)、ラザロのために大きなみわざを成して下さった主を愛し、感謝し、心から慕っていた。高価で純粋なナルドの香油一斤 「ナルド」はインド及び東アジア原産の植物の根から採ったもの。「一斤」は約328グラム。それはユダの言葉によれば「三百デナリ」(5)。すなわち約300日分の労働報酬に相当する高価なものであった。イエスの足にぬり、自分の髪の毛でそれをふいた 香油は本来、王、祭司、預言者の即位のときに用いられた(サムエル記上10・1等)。しかし、ここでマリヤはそれを主イエスの御足に注いだ。頭以外の体の部位に香油を塗ることは通常、死者に対してなされることであった(マルコ16・1参照)。マリヤが主の御足を「髪の毛でふいた」理由は諸説ある。当時、主人や客人の足を洗うのは奴隷の仕事だった。この行いに、マリヤの僕としてのへりくだりの心と仕える姿勢が表れているという説等。彼女は、主イエスの死が近いことを直感し、とっ

さにこのことをしたとも考えられる。いずれの理由であれマリヤの行為は主への特別な献身の表現であった。香油のかおりが家にいっぱいになった この「香油のかおり」に関して、「香油の香りは、これからイエスが行く所どこへでもついて行く。…その香りは十字架へ、そして葬られる墓へと運ばれ、「埋葬の用意」(マルコ14・8)(新改訳)となる。」との霊想もある(藤本満「マルコの福音書」『新実用聖書注解』より)。

4 イスカリオテのユダ マタイ26・8とマルコ14・4は、マリヤの行為に対する弟子たちや人々の憤りを語るが、ヨハネ福音書は特にユダの名前を挙げる。

6 その中身をこまかしていた ユダは会計の役目を任されていた。福音書記者のヨハネは彼の裏切りの動機が金銭欲に関係していたことをほのめかしている。

7 わたしの葬りの日のために 主イエスはマリヤを擁護された。主の十字架の死と葬りの日は迫っていた。主は彼女の行為の隠された意味を明らかにされる。それをとっておいただから 彼女は今まで香油を使う機会があったかもしれないがそれをせず、この一番大切な時に用いた。この時、彼女は主イエスの御体にとっておいた

最高の香油を注がずにはいられなかった。これはラザロをよみがえらせて下さった主のご愛と恵みに応えて彼女が出来る最高の奉仕であった。

8 わたしはいつも共にいるわけではない 貧しい人たちへの施しはいつでも出来るが、死を目前にされた主イエスに対しマリヤが愛と献身を表す機会は、今この時しかなかった。マリヤは図らずも神のご計画の中で、主イエスの「葬りの用意」(マルコ12・8)をしたのである。

自分の持っているもののすべてをささげた彼女の愛と献身に主イエスが感動されたことが、マタイ、マルコ福音書の主の言葉に示されている(マタイ26・13、マルコ14・9)。

後日、実際に主のご遺体を葬ったのは、アリマタヤのヨセフとニコデモであり(19・38〜42)、このときは「香料を入れて亜麻布で巻いた」(19・40)と記されている。

参考図書 山下正雄「ヨハネの福音書」『新実用聖書注解』、村瀬俊夫「ヨハネの福音書」『新聖書注解 新約1』(以上のいのちのことば社)、他

聖書

ヨハネ12・1〜8

タイトル

まごころこもった贈り物

暗唱聖句

香油のかおりが家いっぱいになった。

ヨハネ12・3

目標

キリストへの愛と献身を形に表す者となる。

導入

(松浦みち子)

愛知県日進市に愛知牧場があります。牧場には、いろいろな施設があり、ポニーに乗ったり、乳搾りをしたり楽しい所です。牧場の一角には教会や丘には大十字架が立っています。これは尾関誠一さんというクリスチャンが神様にささげた二七〇〇坪の土地と十字架です。最も困難な時に神の支えがあったことを感謝してささげられました。尾関さんが亡くなった後も、丘の上の十字架は今も輝き続けています。

主への愛を注ぎだすマリヤ

イエス様は、十字架にかかって死ぬ六日前にもう一度ベタニヤ村に来られました。イエス様のエルサレムへの最後の旅の途中のことでした。ベタニヤ村の人々は大喜

びでイエス様とお弟子さんたちを迎え、夕食の用意をし、おもてなしをしたのです。マルタはいつも働き者です。「さあさあ、皆さん手伝って!」「これはあちらのお皿に盛りつけて、これはこちらね。」と、てきぱきと料理の準備を整え、大きなテーブルにはご馳走がいっぱい並べられました。一方、マリヤは「イエス様にまたお会いできるなんて、なんて嬉しいこと! わたし、イエス様のために何ができるかしら!」と考えていました。

いよいよ、イエス様と弟子たちがやってきて楽しい食事が始まりました。ラザロも一緒に食事を食べています。この国の食事の習慣は、わたしたちとはちよつと違います。どんなですか? テーブルを囲んでみんな寝そべて食事するんです。えっ。なんて行儀が悪いのでしょうか。おもしろい習慣ですね。

みんなが楽しくお話しながら食事をしているところに、マリヤがきれいな石膏の壺をもって入ってきました。それはナルドの香油という、とても高価でよい香りのする油が300グラムも入っている壺でした。1グラム1万円近くする油で三百デナリもしました。これは大人の人が1年間一生懸命働いて得る年収に値しました。その頃の



2月

## 2日 礼拝メッセージ例

女の人はお嫁に行く時、壺に入れた香油を持って行く習慣があったので、マリヤはやがて結婚する時のために用意していた大切な香油だったのかもしれないね。

ところがマリヤはイエス様の側に来ると、この香油をイエス様の足にぬり、自分の長い髪の毛でその足をふいたのです。マリヤの心にはイエス様に対する感謝の心があふれていたのです。自分たちの家を訪ねて下さって変わらない愛をもって導いて下さるイエス様、愛する弟ラザロを生き返らせ、悲しみを喜びに変えて下さったイエス様。それと共に、いつもイエス様の足もとで語られる言葉を聞いていたマリヤは、イエス様のこの度の訪問と交わりが最後になると直感したのでしょうか。十字架への道を心に秘めておられるイエス様をお慰めしたいと思つての行動でした。部屋には、香油の心地よい香りがいっぱいに広がりました。一同は「おーっ」と感嘆の声を上げました。マリヤの心からの愛の香りでした。

### マリヤを非難する声

ところがマリヤの行動を非難する声が上がりました。イスカリオテのユダという弟子が怒ってマリヤに言いました。「なぜこの香油を三百デナリに売って、貧しい人

ちに、施さなかったのか」。ユダにはほんとは、貧しい人たちに対する思いやりなんて全くありませんでした。彼はみんなのお金を預かる会計係りをしていて、その中から自分のためにお金を盗んでいたのです。ですから高価な香油を売れば、またお金を盗めると考えたのでしょう。

### マリヤの行為を喜ぶイエス様

しかし、イエス様はマリヤのしたことをとても喜んで下さいました。「なぜ、女を困らせるのか。わたしによい事をしてくれたのだ。」(マタイ26・10)とおっしゃいました。そして、マリヤのこの特別な行為の意味を説明されました。「わたしの葬りの日のために、それをとつておいたのだから。」という意味なのでしょう。ユダヤでは、死んだ人を葬る時、死体に香油をぬる習慣がありました。マリヤのしたことは、やがて十字架で死なれるイエス様を葬るための準備となったのです。マリヤは心からイエス様を愛していたのでイエス様のお心に気づき、大切な宝物をおさげし、お喜ばせしようとしたのですね。

私たちも、自分にとって大切な最高のものをささげ、イエス様に感謝と愛を表わしましょう。

♪ナルドの香油♪(新聖歌386)



# 聖書 ヨハネ12・20～28 テーマ 一粒の麦として

## 序論

(石田高保)

戦後の日本は国民が丸となって経済を成長させるという使命に生きてきましたが、これも今や過去のものとなり、他の使命を求めてさまよっているようです。いったい時代に翻弄されない使命はないものでしょうか。使命は英語でミッションと言い、任務とか、伝道という意味もありますが、あなたのミッションは何でしょうか。

## 一、イエス様の使命

しゅろは旧約聖書では「なつめやし」と訳される常緑樹で、繁栄の象徴とされていました(詩92・12)。ヨハネは黙示録7・9で、しゅろの枝を持った群衆が神を賛美している姿を描いています。今日の個所でも群衆、おそらくガリラヤから過越祭に来ていた巡礼者たちは、詩篇118・25、26を引用し「ホサナ、主の御名によってきたる者に祝福あれ」と叫んでいます。ちなみにホサナは「お救いください」という意味のヘブル語です。主のガリラヤでの活躍を知っていた人々や、ラザロの復活を見聞し

ていた人々は(17、18)、主が世俗的な意味の王となり、奇跡的な力をふるってローマの支配から民族を解放してくれることを期待していました。しかし、その後の言動からわかるように、主はその期待に応えようとはせず、むしろ主はそれと正反対のことを考えておられました。

戦争に勝利した王は普通、馬に乗って凱旋するものですが、主は「ろばの子を見つけて、その上に乗られた」。ろばは、馬よりもはるかに小さく、力も見栄えもありません。ろばの子ならなおさらです。ゼカリヤは救い主の使命を知った上で「見よ、あなたの王がろばの子に乗っておいでになる」と預言しました(ゼカリヤ9・9)。それに続けて、「わたしは…エルサレムから軍馬を断つ。…彼は国々の民に平和を告げ」(同9・10)と記しています。エルサレム入城の時、イエス様を政治的な王と考えていたのは、群衆だけではなく、弟子たちも同じでした。しかし「イエスが栄光を受けられた時」(16)、つまり、十字架、復活、昇天の後に、弟子たちはゼカリヤがイエス様について預言していたことに気づいたのです。主の使命が政治的な解放ではなく、罪からの解放であったことは、その後の主の行動を見ればよく理解できます。

## 二、主の弟子の使命

主に敵対していたパリサイ人が「世をあけて彼のあとを追って行った」(19)と落胆するほど、イエス様の人氣は高まってゆきます。さらに巡礼に来ていたギリシヤ人たち、割礼は受けていないがイスラエルの神を信じていた人々も(イエスにお目にかかりたい)と訪ねてきます。しかし今や主の覚悟されていた「時」が来しました(2・4、7・6参照)。十字架においてユダヤ人だけでなく、ギリシヤ人をはじめ全人類の罪の身代わりになるという神の時が来たのです。それは主が一粒の麦になることによって、初めて実現することにはかななりません。神であるキリスト(一粒の麦)は、人となってこの地上に來た(地に落ちた)。さらに十字架で死なれるとき、豊かに実を結ぶ(全人類の救いとなる)。これは、二千年前、文字どおりに実現しました。しかしこの真理は、単にイエス様の場合だけではありません。(自分の命を愛する者はそれを失い、この世で自分の命を憎む者は、それを保って永遠の命に至るであろう)、主に従う者たちも(この世で自分の命を憎む者は、それを保って永遠の命に至る)のである。この場合、憎むとは「第一としない」と

いう意味です。自分ばかりを大切に生きる生き方をやめるということ。一粒の麦が死ぬとは、麦としての形を失うことを意味します。しかし形は失われても、何十倍もの収穫となって実を結び、命は次の世代に受け継がれるのです。

しゅろの枝になって、主を賛美することは素晴らしいことです。ろばの子のように主のご用に用いられることも幸いです。しかしもつと大切なのは、一粒の麦になって死ぬことでしょう。私たちも周りの人のために自分を使う生き方にチャレンジするとき、豊かに実を結ぶことができます。身の周りの小さな十字架を選び取ることができます。たとえば損得を越えて人を助ける、好き嫌いを越えて親切にすること、遺恨を越えて人を赦すこと、煩わしさを越えて人の話に耳を傾けることなどです。

### 結論

そのように一粒の麦となって死ぬとき、神が力強く働いてくださいます。(更にそれをあらわす)。たとい損になることでも、そのような生き方を選ぶことがキリストの弟子の使命ではないでしょうか。さて、主から示されているあなたの使命、ミッションは何でしょうか。

## 研究資料

(宮澤清志)

## テキスト

20 **ギリシヤ人** この言葉をもって、必ずしも人種としてのギリシヤ人を意味するわけではない。この言葉にはいくつかの意味があるが、ユダヤ教に改宗した異教徒であったか、あるいはユダヤ教に理解を持つ「神を恐れる異邦人」(使徒8・27)かのいずれかであったものと推測される。いずれにしても、ヨハネがこの表現をここに示したのは、イエスの御わざが、同胞イスラエルから異邦人に移ることの序曲であり、その意味で新しい時の始まりを告げる注目すべき出来事なのである。

21 **彼らはガラヤのベツサイダ出であるピリポのところ**にきて このギリシヤ人たちがなぜ直接イエスのもとにではなくピリポの所に來たのか、はっきりした理由はわからないが、ピリポとアンデレの名が記されていることを考えると、この二人がギリシヤ的な名前の持ち主であって、またギリシヤ人と何らかのつながりがあったのではないかと推測できる。あるいは、次の節も含めて理解すると、イエスの福音がその弟子たちを経由してはじ

めて彼らに届いたのであり、この事はイエスの深い必然であったと理解する学者もいる。含蓄のある黙想である。**君よ**(ギ)キユリエ) 通常「主」と訳される言葉である。この言葉を用いることによって、主と使徒たちに対する尊敬の思いを表したものであろう。**イエスにお目にかかりたいのですが** ある英訳聖書では、「イエスにお目にかかれるとよいのですが」と、日本語訳より少し弱く訳されている。しかし、なぜ彼らがイエスにお目にかかりたいのか、その動機は定かではない。単なる好奇心からであったかもしれない(ルカ19章のザアカイ他)。

23 **人の子が栄光を受ける時がきた** この文の中心は「時がきた」である(ギリシヤ語の語順ではこの言葉が最初にある)。ヨハネはこれまで繰り返し「わたしの時はまだきていません」と語ってきた(2・4、7・6、8・20)。しかしやがてその「時」がくることを、慎重に語ってきた。そして時いたって「人の子が栄光を受ける時がきた」と語る。それはイエスの十字架の時であり、完成の時である。この宣言を聞いて、群衆たちは、いよいよローマの支配を打ち破り、イスラエルの王国を樹立する栄光の時の到来を夢見たに違いない。

24 よくよくあなたがたに言うておく イエスが非常に重要な真理を語る時にしばしば用いる表現。一粒の麦が地に落ちて死ななければ… よく知られた自然の事例をもって、真理を説明する。キリストの十字架の死は、この世に命をもたらすものである。イエスにおける栄光の時とは、自らが栄光を受ける時ではなく、人々の栄光のために自らを十字架にささげる贖いの死の時であつた。

25 この逆説の言葉もしばしば福音書において語られてきた（マタイ10・39、16・25、マルコ8・35、ルカ9・24、17・33）。自分の命 この「命」（ギ）プシュケー）は肉的生命であり、この命によってのみ生きようとすると者は、永遠の命 を失うのである。こちらの「命」（ギ）ゾーエー）は、神の国の生命、霊的生命である。

27 この節は、ヨハネのゲツセマネとも呼ばれている箇所である。心（ギ）プシュケー） 25節の「命」と同じ言葉である。あるがままとしての人間の心は、死を前にして悩みを禁じることはできず、動揺せざるを得ない。ゲツセマネにおける「わたしは悲しみのあまり死ぬほどである」（マタイ26・38）という言葉と同じである。それは肉体的な死の恐怖でなく、罪と死の重荷を一身に背負っ

た暗黒の世界がイエスの心を支配しているのである。父よ、この時からわたしをお救い下さい 人間イエスの叫びであり、ゲツセマネにおける「この杯をわたしから取りのけてください」（マルコ14・36）の意味を持つ言葉である。しかし、わたしはこのために、この時に至つたのです イエスはただ十字架の一点を見つめていた。

28 父よ、み名があがめられますように この祈りこそがイエスの祈りの根源であり、私たちの祈りのはじめでなければならぬ。天から声があつた 福音書は、三度、天からの声を記述している。イエスのパプテスマ（マルコ1・11他）と変貌山（マルコ9・7他）とこの箇所である。いずれもイエスの生涯においては転機的な出来事といえよう。そしてヨハネはこの出来事をイエスの転機的な出来事と見たのである。わたしはすでに栄光をあらわした。そして、更にそれをあらわすであろう イエスの十字架への道が、神の定められた道であり、神のみこころにかなう道であることを表している。

参考図書 A. T. Robertson 「Word Pictures in the New Testament」 (Broadman) 、ビ・エフ・バックストン「ヨハネ傳講義」（バックストン記念霊交会）他

## 聖書

ヨハネ12・20～28

## タイトル

## 暗唱聖句

一粒の麦として  
一粒の麦が地に落ちて死ななければ、そ  
れはただ一粒のままである。しかし、も  
し死んだなら、豊かに実を結ぶ。

ヨハネ12・24

## 目標

一粒の麦として死んでくださったキリス  
トによる救いを受け取る。

## 導入

(和田牧子)

みなさんは朝顔を育てたことはありませんか。黒い種を  
一つ植えると、ツルがぐんぐん伸びてきて、たくさん  
美しい花を咲かせますね。たくさんのお花が枯れた後、さ  
らにたくさんのお種がとれます。すごいですね。神様のく  
ださった生命力を感じます。

## 「時がきた!」

イエス様がエルサレムに入城されて、もうすぐ十字架  
にかかるというある日のことです。ちょうど、エルサレ  
ムの町は過ぎ越しの祭りのためにたくさんのお人たちが集  
まっていました。その中にはギリシヤ人の人もいて、数

人がイエス様にお会いしたいとやってきたのです。する  
とイエス様は、その人たちに言われました。「人の子(イ  
エス様)が栄光を受ける時が来ました」。

何のことでしょうか? 栄光というのは「かがやかしい  
こと」「すばらしいこと」という意味があります。人々は

「えっ? とうとうイエス様が王さまになって私たちを  
おさめ、幸せにしてくれるの?」と喜んだと思います。  
だって、このことを言われた直前にイエス様は、死んだ  
人を生き返らせるといふすごいことをなさったのですか  
ら!

でもイエス様の「時がきた」の意味はそういうみんな  
からキヤーキヤー騒がれるようなこととはちがうよう  
でした。

## 一粒の麦のたとえ

「よく聞きなさい」と、イエス様は続いて言われまし  
た。「一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のまま  
です。しかし、もし死んだなら、豊かな実を結びます」。  
さきほどの朝顔とおなじく、一粒の麦を土の中に植えて  
みたらどうでしょう。水をやり、肥料をやり、やがて成  
長すればたくさんのお実がなりますね。たった一つの麦の

種からたくさんの実を結ぶのです。

でも、土に埋められた麦を掘り返してみたらどうなっているでしょう。きつとその麦自体は腐って使い物にならない状態になっていると思います。

古い麦の種が死ぬことなしには新しい多くの命を生み出すことはできないのですね。

### イエス様ご自身が一粒の麦に

さっきお話になった「人の子が栄光を受ける時が来ました」の意味がここからわかります。イエス様は、多くの人たちから王様としてほめたたえられるためにこの世に来られたではありませんでした。

世界中の人たちの罪の身代わりに、一粒の麦となって死ぬためにこの世に来られたのです。そして、「いよいよその時がきた！」と言われたのです。イエス様はやがて十字架刑という何よりも重い刑罰を受けて苦しんで苦しんで死なれました。それは自分の罪のためではなく、世界中の人々が罪から救われて生きることができするためでした。わたしたちが永遠の死ではなく、永遠のいのちにあずかることができるために、死んでくださったのです。それで私たちは、罪と滅びの恐怖から自由にされ、心

が軽くされたのです。

イエス様の人生は、生まれた時から貧しいものでした。宿に泊まることができず馬小屋で生まれ、その生涯は自分がほめたたえられることよりも、弱い、貧しい人たちが、病氣の人、女性や子どもを大切にされましたよ。イエス様のまわりにそういう人たちが思わず集まってくるような、優しい優しいお方だったのです。

### 結び

わたしたちも、イエス様のようにになりたいと思いますか？ えっ、死ぬのは怖い？ もちろんイエス様のように十字架で死ぬという意味ではありませんよ！ わたしたちは自分第一ではなく、イエス様と周りの人たちを愛して、大切にして生きていけば良いのです。人よりすぐれた者になることではなく、他の人たちがイエス様にあつて幸せになってくれるためには、どんなふうにお役にたてるかな？と考えるながら生きていけばよいのです。あとは成長させてくださるのは神様です。神様が豊かな実を結ばせてくださいますよ。

♪ 気づかなかった♪ (イン 34)



# 聖書 ヨハネ13・1～15

## テーマ 洗足の恵み

### 序論

(石田高保)

洗足の出来事を通して、人の成長のために仕える人が、人の上に立つのにふさわしく、影響力のある人物となることを教えられます。

### 一、イエス様に足を洗っていただく

イエス様のし始めたことを見て、弟子たちはみんな<sup>あ</sup>然としました。なぜなら上着を脱いで手ぬぐいを取って腰に巻き、水をたらいに入れて人の足を洗い、それを手ぬぐいで拭いたからです。それは奴隷のする仕事であって、決して自由人、まして教師のする事ではなかったからです。ペテロをはじめ弟子たちはどんなにか戸惑い、<sup>おそ</sup>恐れ多く感じたことか想像に難くありません。

なぜイエス様はこのような度肝を抜くことをされたのでしょうか。いわゆる洗足の出来事は、14節に記されているように、弟子たちに互いに足を洗い合うべきことを教えた「手本」、実物教訓というだけではないようです。それならば最後の晩餐まで待つことなく、もっと前に弟

子の足を洗ってもよかったからです。十字架の前夜にこのことをされたのは、これから流すイエス様の血が、弟子たちの、そして全人類の罪を洗いきよめる力のあることを示すためだったからです。

まずイエス様には、ご自分の死が近づいていること、いよいよ十字架にかかって救いの道を開く時の間近なことがわかっていました。〈自分は神から出てきて、神にかえろうとしていることを思い〉。奴隷の格好をし、その仕事をするることによって、ご自分が究極の奴隷であることを示そうとしました。それは自分の罪のない命を差し出すことによって、人類に救いの道を開く十字架の姿です。〈最後まで(徹底的に)愛し通された〉、十字架を暗示する究極の愛を示されました。神から愛していただくために私たちのできることは何一つないわけです。

弟子たちはすでに救われていた人たちでした。けれどもイエス様はあえて弟子たちの足を洗っておられます。それならば足を洗っていたかなくてもいいようなものですが、〈すでにからだを洗った者は、足のほかは洗う必要がない。全身がきれいなだから〉、弟子たちに対して全身がきれいだと言っているのは、すでに救われてい



ることを意味します。この当時、人の家に食事招かれると、全身を洗ってから出かけました。しかし道で足は汚れるので、玄関で奴隷に洗ってもらいます。私たちも全身ではなく足だけはイエス様に洗っていただく必要があります。日々さまざまな汚れを受けており、生活の中でいろいろと罪も犯します。しかしその汚れや罪は、そのたびごとに悔い改めれば、イエス様の血によって洗いきよめていただけます。「御子イエスの血が、すべての罪からわたしたちをきよめるのである」(1ヨハネ1:7)。

## 二、互いに足を洗い合う

イエス様に罪を赦<sup>ゆる</sup>していただいた人は、イエス様によって日々足を洗っていただくことができます。罪や汚れをきよめ続けていただくのです。しかし今度は私たちがお互いに足を洗い合う番です。(わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするように、わたしは手本を示したのだ)、このあと弟子たちがお互いの足を洗い合ったとか、初代教会で洗足の儀式が始まったという記事は聖書にありませんが、彼らには鮮烈な記憶として残ったはずで。そしてお互いの間にやっかみや、い

がみ合いや、さばく思いが起きたとき、この出来事を思い出しては悔い改め、へりくだって隣りに仕えて行ったことでしょう。そして歴代の教会では繰り返し説教で語られたに違いありません。特にこの箇所は語られるだけでなく、神の家族の中で実践される必要があります。

## 結論

この出来事ほど、イエス様が説き、実践されたリーダーシップが記されたものはないでしょう。「あなたがたの間で偉くなりたいと思う者は、仕える人となり、あなたがたの間でかしくなりたいと思う者は、すべての人の僕とならねばならない。人の子が来たのも、仕えられるためではなく、仕えるためであり」(マルコ10:43-45)。人間は普通、何とかして人の上に立とう、人を動かそう、支配しようと思うもの。しかし神の国の価値観はより良く人に仕える人が偉い人です。私たちも身の周りの人が、イエス様とつながって自立し、成長できるように仕えるのです。また人の足を洗うとは、その人の間違いや弱さや罪をカバーしてあげることでもあります。これは特に家族の間で必要です。さて、あなたは誰の足を洗おうと決心するでしょうか。

## 研究資料

(宮澤清志)

## テキスト

1 この節は、13章以下の受難物語全体の序文と見ることができる。**過越の祭** ユダヤ人の三大祭りのひとつで、旧約聖書の出エジプトを記念して守った。神の救いの恵みのしるしとして行う重要な祭りであった。この日には、一歳の雄の小羊をほふり、その血を入口の柱と鴨居に塗り、肉を過越の小羊として食べた。この過越の小羊はキリストの型であり(ヨハネ1・29)、またこの祭には多くの人々がエルサレムに足を運ぶ祭でもあったことから、神はこの日をあえて選ばれてキリストの十字架の「時」(1)としたのであろう。**この世を去って父のみもとに行くべき自分の時** ヨハネにとって「死」とは、この地上での働きを終えて「父の家」に行く、という「旅」であり、我が家へと帰ることなのである。**世に在る自分の者たち** イエスを受け入れた、少数の信者の群れ、すなわち教会(エペソ5・25)。**最後まで愛し通された** 最後までという言葉は「極限まで」という意味と、「最後まで」という意味がある。新共同訳や新改訳では前者が、

口語訳では後者の意味が強く響く。

2 ここからが洗足物語の序論となる。

4〜5 この4節から、イエスの洗足物語の本題へと入っていく。この箇所では、イエスの洗足の情景を詳しく描写する。洗足は、古代では一般に奴隷の仕事とされてきた。しかも、イスラエルでは異教徒の奴隷にしかさせなかった仕事である。

6〜7 イエスの洗足が進み、いよいよその順番がペテロにくる。そのペテロが当然の疑問をイエスにぶつける。**あなたがわたしの足をお洗になるのですか** ここでは「あなた」と「わたし」が強調されている。「あなたのようなお方が」「わたしのような者の」足をお洗になるのですか、というような意味であらう。このみ言葉は、古来より多くのキリスト者が理解できない事柄について、解決の鍵を与えてきた言葉である。神の永遠のご計画、神が私たちに求めておられる意図は、聖霊を通してでなければ私たちは知ることはできないのである。同時にそれらを私たちが知ることは、神の「時」があるのである。**あとで** 真理の御霊(ヨハネ16・13)である聖霊の到来の後、という意味。

8 ペテロの次なる問い。ここでもやはり「わたしの」が強調され、「他の弟子たちの足はお洗いになっても、このわたしの足だけは…」というような意味になる。もしわたしがあなたの足を洗わないなら… このイエスの行為は、人間的な愛の行為ではなく、人となられた神の子としての奉仕なのである。この行為を頑として退けようとするペテロの行為は、イエスの差し出しておられる愛の手そのものを退け、彼の救いそのものを拒否したのである。

9〜10 ペテロはまだ、イエスの洗足が全身をきよくする象徴としての行為であることを悟っていなかった。だからひとたびイエスの救いに与り、その汚れを洗いきよめていただいた者は、全身がきよいのであって、今さら手や頭まで個別に洗う必要はない、というのである。

11 10節後半からは、イスカリオテのユダに関する言及がなされる。イエスはユダの裏切りを既に予見した上でこの言葉を語っている。では、私たちはこのイエスの言葉をどのように理解すべきであろうか。10節後半の言葉は、イエスのユダに対する愛と、ユダに対する救いの道、そして何よりユダへの悔い改めの機会を与えた言葉であ

ろうと思う。しかし、ユダは自らその道を閉ざしてしまったのである。

12〜15 12節以下は、イエスの洗足についての説話的部分である。「教師」「主」とは、単にユダヤ人の呼称というよりも、イエスへの神祕的告白であろう。「教師」「主」であるお方から最高の愛の奉仕を受けたしもべであるキリスト者は、同じ仲間であるしもべたちを愛する責任がある、というのである。キリスト教倫理の中心は、キリストご自身の模範に生きることである。「わたし(主)があなたがたにしたこと」(12)を悟り、「わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするように」というイエスの「手本」(15)に従って歩むことが、キリストのしもべとして生きる者の道であるというのである。

参考図書 A. T. Robertson 「Word Pictures in the New

Testament」(Broadman)・J・エフ・バックストン「ヨハネ傳講義」(バックストン記念霊交会)、ジョン・C・ライル「ライル福音書講解 ヨハネ」(聖書図書刊行会) 他

## 聖書

ヨハネ13・1～15

## タイトル

洗足の恵み

## 暗唱聖句

もしわたしがあなたの足を洗わないなら、あなたはわたしとなんの係わりもなくなる。  
ヨハネ13・8

## 目標

キリストの十字架の血による罪の赦しの恵みに生きる者となる。

## 導入

(和田牧子)

みなさんは、大震災にあった方たちが、避難所で足湯マッサージしてもらっている姿を見たことはありませんか？ なかなかお風呂に入れない中、ボランティアの人に足を洗ってもらっている方たちはほんとうに気持ちよさそうですよね。

## 弟子の足を洗われたイエス様

もうすぐイエス様が十字架にかかられるという頃のことです。イエス様は弟子たちを最後の最後まで愛しておられました。イエス様はその日も弟子たちとともに夕食の席に着こうとしておられました。

イエス様はすつと夕食の席から立ちあがり、上着をぬが

れました。また手ぬぐいを取って、腰にまとわれました。

そしてたらいに水を入れて、弟子たちの足を洗い、腰にまもっていた手ぬぐいでいねいに拭き始められたのです。その当時、人々は身体を洗ってから夕食の場へとむかう習慣がありました。しかし、向かう途中で土ほこりにまみれて、あつというまに足が汚れてしまうのです。弟子たちの足もずいぶん汚れていたでしょうね。

この足を洗う役目は、実は奴隷の仕事でした。その家でもっともいやしいとされていた身分の人がする仕事だったのです。でもイエス様はこのとき弟子たち一人一人の足をていねいに洗われたのです。ペテロの番になったとき、ペテロは思わず「主よ、あなたが私の足を洗ってくださるのですか？」と聞きました。恐れ多くも、自分たちの先生であるイエス様に足を洗ってもらうなんて、ビックリしたのでしょうか。それに対してイエス様は「わたしがしていることは、今はわからなくても、後でわかるようになります」とおっしゃいました。

ペテロは「イエス様！ 決して私の足を洗わないでください！」と言いました。するとイエス様は「もしわたしがあなたの足を洗わないなら、あなたはわたしとなん

の関係もなくなる」と答えられたのです。

なんの関係もないなんて：そんなさみしいことをなぜ言われたのでしょうか。

イエス様が弟子の足を洗うことは、これから十字架にかかって、全世界の人々の罪を背負って血を流し死なれることを意味していました。人の中にあるどうすることもできない汚い罪を洗いきよめるために、イエス様は十字架刑という一番いたくて苦しい刑罰を受けてくださったのです。それはほんとうに奴隷以上にみじめな姿でした。そのことによって、わたしたちは罪の滅びから救われ、ゆるされ、きよめられたのです。なんとという感謝なことでしょう！

### お互いに足を洗いあおう

イエス様は弟子たちの足を洗われたあと、このように言われましたよ。「主であり、先生であるこのわたしが、あなた方の足を洗ったからには、あなたがたもまた、お互いに足を洗うべきである」と。

みなさんは、お互いに足を洗いあうとはどのようなことだと思いますか？

学校や塾でだれが一番？ と競争することがあるかも

しれません。もちろんかけっこや、勉強を頑張ることは大切です。けれども、そのことで自分が他の人より偉いと思ったり、弱い人をばかにするのなら、それはイエス様のお姿とはちよつとちがいます。お互いに足を洗うとは、心を低くして周りのお友だちのお手伝いをする事なんです。みなさんの得意なこととはなんですか？ 絵を描くこと、小さい子と仲良く遊んであげること、楽器演奏、力仕事？ 自分の得意なことを生かして、周りの人たちのお役に立てるような生き方をする事なのですね。また、たとえ何もできなくても、周りの人たちを愛してお祈りするなら、それは必ず用いられますよ。うれしいですね！

イエス様は身をもって、そのことを教えてくださったのですね。

### 結び

わたしたちも、イエス様の十字架をいつも忘れないで、イエス様の愛で心をいっぱいにしていただきながら、周りの家族やお友だちのお手伝いをしていきましょう。

自分の力ではなく、イエス様の力によって！

♪主の手足になろう♪ (イン92、ホ86)

# 聖書 ヨハネ14・1～6 テーマ 道なるキリスト

## 序論

(福井文彦)

13章から17章は、イエスが十字架にかかられる前になされた最後の語りかけである。これは普通、弟子たちへの「告別説教」と呼ばれるものである。この14章においては、天国と聖霊についての説き明かしがなされているが、どちらもキリスト教信仰の根幹にかかわる重要な部分である。それは、弟子たちの不安と恐れに対して、彼らを励まし力づけ、信仰を保たせるためであった。

## 一、心を騒がすな

その時、イエスに対するユダヤ人(特に指導者たち)の反感と敵意、憎悪の念が殺意にまで達していた(5・18、11・53)。そのためイエスの弟子たちも心が騒ぎ、重苦しい不安と恐れの中にあつた。

しかも彼らは、仲間の弟子の中から主を裏切る者が出ることを、イエスから聞かされた(13・21)。さらには、ペテロの失態の予告(13・36～38)と、師と仰ぎつつ従ってきたイエスご自身が、彼らのもとを去って行かれるこ

とも聞かされたのである(13・33)。

これらのため弟子たちはショックを受け、動揺し、不安、心配、恐れのために、心が騒いでいた。そのような彼らに対して、主は「あなたがたは、心を騒がせないがよい。神を信じ、またわたしを信じなさい」と言われ、慰めと励ましを与えられた。

心を騒がせ、動揺することは失敗、敗北への第一歩である。そのことから守られ、不安と恐れからの救いとそれに勝利するために、神を信じ、イエスを信じることを勧められたのである。

## 二、天国について

イエスが弟子たちから去って行くことは、実は彼らのためであつた。イエスは、弟子たちが神と共にいつまでも住み、神を永遠に喜ぶことのできる道を開くために去って行かれるのである(2)。

イエスはまず天国を「わたしの父の家」と表現された。天国、それは神の家であり、そこには神の臨在があり、神こそがその所有者、その支配者である。神の臨在、その監督のもとに、神のみ心が常に完全な形で遂行される、これが「わたしの父の家」と表現された天国である。



続いてイエスは天国は〈すまい〉であると言われた。〈すまい〉には「モナイ」というギリシャ語が使われ、生活する場所を意味する。そこは一日の労苦から解放され、十分な休息、くつろぎ、安らぎを得ながら、生活するところである。すなわち、天国は一切の労苦から私たちを解放し、満ち満ちた休息、憩いを提供するところである。

イエスは、天国が〈あなたがたのため〉であり、〈場所を用意しに行く〉と言われたように、私たちのための場所であり、イエスよって備えられる場所であると教えられる。そこは地上のような主との別離は全くないところで、私たちをそこに迎え入れるためにイエスが再びこの地上に來られるのである。

### 三、天国への道

そこで、イエスは弟子たちに〈わたしがどこへ行くのか、その道はあなたがたにわかっている〉と言われた。主はどういうお方で、これからどういうことをしようとしているのか、繰り返し教えておられたからである。十字架にかかって死に、3日目に復活して、天に歸られる。そして天に歸られたら、弟子たちのためにそのすまいを

用意して、また迎えに來るということである。

しかし、これを聞いたトマスは、よく理解できず、〈主よ、どこへおいでになるのか、わたしたちにはわかりません〉と質問をした。すると、イエスは〈わたしは道であり、真理であり、命である。だれでもわたしによらないでは、父のみもとに行くことはできない〉と答えられた。イエスはご自分のみが、一切の解決者であり、救い主であること、父のみもと（天国）への唯一の道であると宣言されたのである。

人類は罪のために真理を見失って、永遠の滅びに至る人生を歩んでいる。罪人は、イエスを通してでなければ、だれ一人、父なる神のみもと（天国）に行くことができないのである。

### 結論

イエスは心騒がせ、動揺し、不安と恐れの中にある弟子たちに、天国で主と共に住むという希望と喜びを説き明かされた。さらに、その準備が完了した時に彼らを迎えに來ると約束された（3）。このイエスの約束は、弟子たちに大きな希望と勇気を与え、彼らを大胆な信仰者へと変えていったのである。



## 研究資料

(宮澤清志)

週題として「道なるキリスト」というテーマが与えられている。そして目標として「天国への道であるキリストを信じる」とある。信仰者として、キリストが「道」であるという時、それは様々に黙想できる言葉である。しかし同時に教会学校で御言葉を語る者として、キリストが「道」であるという時、まずはこの目標を心にとめておきたい。幼子を前にして、説教者として伝えたいことは山ほどある。しかし、まずはこの目標に立つて語り、思いめぐらすことが求められる。

## テキスト

1 あなたがたは、心を騒がせないがよい 「心を騒がせる」という言葉は、直訳すれば、心がかき乱されるということである。「騒がせる」というギリシャ語は、他の個所では「不安になる」「惑わす」「おびえる」「うろたえる」等、様々に訳される。

しかし、弟子たちは、なぜ「心を騒がせて」いるのだろうか。弟子たちの身に置き換えて思いを巡らしてみることが、また私たちに必要であることである。ある

注解者は、差し迫ったイエスの死が、弟子たちの心に大きな不安と動揺をもたらせたのではないかと語る。すなわち師との決別である。しかし別の注解者はそれよりもイエスの死を彼の敗北の結果ととらえたために、それが彼らに挫折感を与えたゆえではないかと述べる。神を信じ、またわたしを信じなさい 神を信じるということは、何か超越的な存在として心の中の神の姿に手を合わせることはなく、この後十字架にかかって死なれ、よみがえられた主イエス・キリストを信じることである。同時にこの宣言は、神に対する信仰とイエスに対する信仰とを同列におく、極めて重要な意味を持つ宣言である。

2 すまい 「マンション(大豪邸)」「(NIV)」。主が私たちのために天にて備えられる住まいは、大豪邸であり、その大豪邸を備えに行くことがキリスト昇天の目的の一つである。あなたがたのために、場所を用意しに行くのだから イエスの死にどのような積極的な意味があるのかを示す重要な意味を持つ言葉である。イエスの十字架の死とは、地的にはイエスの無惨な敗北の死である。しかし天的にはイエスは父なる神の御許にお帰りになり、そこで彼を信じる人々を迎え入れるための準備をなさる

のである。

3 そして、行つて、場所の用意ができたならば、またきて、あなたがたをわたしのところに迎えよう この個所は、多くの解釈ではキリストの再臨を指すものと考えられる。しかし、18節との関連から、後の聖霊降臨を指す解釈も可能であるし、また現在私たちとともに住まわれるという理解にも立つことができる(23)。わたしのおる所にあなたがたもおらせるためである わたしのおる所とは、天国のことである。天国とは、神の恵みの支配を指す言葉である。それゆえ天国とは、単純に死後の世界のことではなく、現在神の恵みの支配のただ中にあることである。

4 イエスはかつて弟子たちに「今しばらくの間、わたしはあなたがたと一緒にいて、それから、わたしをおつかわしになったかたのみもとに行く」(7・33)と語られた。そればかりでなく、主は弟子たちに繰り返してご自分はどこへ行かれるかを語ってきた。しかし、弟子たちはついに理解することができなかったのである。

5 道 トマスはこの言葉を、ある場所を指す言葉として理解したのであろう。

6 わたしは道であり、真理であり、命である 前節に

おいて「道」を物理的・空間的に理解したトマスに対して、主イエスこそが父の家に達する道であり、ご自身の十字架の贖いと仲保において、神の命にあずかる道を開いてくださったことを示す。そして、自らが「真理」であるとは、イエスご自身が神について、また神と人についての「真理」そのものであり、すべての知識の源は、主を知ることであることを示す。そして、自らが「命」であるとは、イエスご自身がすべての命の根であり、永遠の命の与え主であることを示す。だれでもわたしによらないでは、父のみもとに行くことはできない 主は私たちの天の父に至る唯一の道なのである。キリストを拒絶する時、人はすべてを失う。しかし「父のみもとに行くこと」は、ただ終わりの時のことではない。今この人生において、親密な関係のもとで平安と慰めを得るために父の御許へ行く道でもある。

#### 参考図書

B・F・バックストン「ヨハネ傳講義」(バックストン記念靈交会)、高橋三郎「ヨハネ伝講義」(待晨堂)他

聖書 ヨハネ14・1～6

タイトル 道なるキリスト

暗唱聖句 わたしは道であり、真理であり、命である。 ヨハネ14・6

目標 天国への道であるキリストを信じる。

導入 (和田牧子)

今日はマラソン大会。いよいよスタートです。ヨーイ、ドン! 「ねえねえ」「ん?」「このマラソン、どこに向かってどう走ればいいの?」「あれれ、そう言えばどこだっけ?」なぐんてこと、ありませんよね。私たちの人生は、一回限りの大切なマラソンみたいなもの。コースとゴールがはっきりわからないと、走れませんよね。でも大丈夫! イエス様がちゃんと教えてくださっていますよ。

「心配しなくて大丈夫」

こわいなり、心配だなりって、心がざわざわすること、ありませんか? イエス様の弟子たちの心は今、心配や恐れでいっぱいです。だって大好きなイエス様が、もうすぐいなくなっちゃうって言うのですから。しかも、十字架にかかって死んでしまうなんて…。でも、イエ

ス様はおっしゃいました。「あなたがたは、心を騒がせないがよい」。

そう、「心配しなくて大丈夫! 父なる神さまを信じなさい。そして、わたしを信じるのです」と。だって、イエス様が死んでしまうのは、それですべてが終わってしまうのではなく、弟子たちにとっても、私たちにとっても、すばらしい祝福なのですから。

「わたしの父の家」

実はね、イエス様が十字架で死なれるのは、私たちを罪の滅びから救うためであり、たとえ私たちの体は死んでも、いつまでも生きる命をくださるためなのです。やがてイエス様は父なる神さまのもとにお帰りになり、イエス様を救い主として信じるすべての人々を天国に迎えてくださるためなのです。

イエス様は「わたしの父の家には、すまいがたくさんある。…あなたがたのために、場所を用意しに行くのだから。そして、行って、場所の用意ができたならば、またきて、あなたがたをわたしのところに迎えよう」と言ってくれました。

イエス様は天国を「わたしの父の家」とおっしゃいま

した。父なる神さまの大きな愛が満ちあふれるところです。もう、心配なことや、イヤなこと、けがや病気もいっさいない、安心感でいっぱい最高の場所です。そこに私たちのために準備してくださる住まいは、小さなお家でしょいか？ それでもうれしいですが、実は大豪邸なんですって！ やったー！ 弟子たちの目もきらきら輝いたかな？ うーん、聖書を読むと、弟子たちはびんと来なかったみたい…。

### 「わたしが道」

そこで、イエス様はおっしゃいました。「わたしは道であり、真理であり、命である。だれでもわたしによりないでは、父のみもとに行くことはできない」。そうなんです。イエスさまだけが父なる神様のもとにつながるたった一本の道なのです。つまり、イエス様っていう確かなコースを、天国っていう確かなゴール目指して生きるのです。

しかも、天国って、死んでしまっただけじゃ行けない場所なのではありません。イエス様が道だつてことは、イエス様という道の上を歩いているかぎり、いつでもイエス様がいつしよ、いつも天国なのです！ イエス様を

信じるあなたの心の中が、もう天国なのです。

### 例話

アフリカ旅行でジャングルに奥深く入って行った人のお話です。彼がやとったガイドは先に立って、背の高い草を倒しながら進んでいます。あまりにも暑くて疲れてガイドにたずねました。「ここはどこなんだ？ 私をどこへ連れて行こうとしているのか、ちゃんとわかってるんだらうね？」ベテランのガイドは足を止め、振り返って言いました。「私が道です」。私たちも、時々同じような質問を神様にしてしまうかもしれません。「どうなってるの？ほんとにあなたに従っていて大丈夫でしょうか？」そんな不安なときや怖いときは足もとにある、確かな道を思い出しましょう。イエス様が十字架にかかって、神様との架け橋になってくださったことを。

### 結び

イエス様を信じているなら、みんなは天国に向かってまっすぐに進んでいます。心が不安や心配であふれそうになっても大丈夫。道であるイエス様にしっかりとつながっているなら、心は天国の喜びであふれますよ！

♪ワン・ウェイ♪ (GS 10)

# 聖書 ヨハネ14・12・17 テーマ 別の助け主

序論

(小泉 創)

主が十字架に向かわれる前夜、弟子たちと最後の食事をとられた際に教えてくださった箇所です。

## 一、主への願い

イエスは弟子たちに、願うことは何でもかなえてあげようと約束してくださいました。それは私たちの祈りを励ましてくださる言葉でもあります。私たちは臆することなく主に求めることができます。

しかしそれだけではなく、この場面は特別なものです。イエスは心を定めて弟子たちを最後まで愛しつくされました。愛する弟子たちの中に主を裏切るものがあることを告げられました。ご自身が弟子たちのものを去っていくこともお語りになりました。そして弟子たちに、ご自分のわざを引き継ぐようにと語られました。それは福音宣教のわざでしょう。そういう中で、願うことは何でもかなえてあげようとお約束です。弟子たちが一番願

うべきだったことは、主イエスの愛を受けた者たちとして、任されたわざを全うするにふさわしい者としてください、ということではなかったでしょうか。ともすれば主を裏切るような自分を、心の深みから新しくしてください、ということではなかったでしょうか。そうしていただかなければ、到底自分たちでは間に合わないからです。

私たちにもこの弟子たちと同じことが任されています。ですから私たちも主に願わなければなりません。

## 二、戒めを守る

弟子たちは主を愛していましたから、主の教えられた「わたしのいましめ」を守るように命じられました。イエスを守るように教えてくださっていることです。「わたしのいましめは、これである。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互に愛し合いなさい」(ヨハネ15・12)。

互いに愛し合うこと、主が十字架でなしてくださったように、友のために自分の命を捨てることが、主の与えてくださったいましめなのです。これは決して簡単なこ

とはありません。だからこそ、私たちは主に願わなければなりません。

あなたには愛することに困難を覚えてしまう人がありますでしょうか。その人のために自分の命を捨てるなんて考えられないことでしょうか。それを乗り越える力、愛を、主に願いまししょう。「わたしの名によって願うことは、なんでもかなえてあげよう」との約束に期待しましょう。

### 三、もう一人の助け主

弟子たちに対して、イエスは助け主をおくると約束してくださいました。それは真理の御霊、聖霊なる神です。もう一人の助け主（新改訳）です。イエスを信じる前から聖霊は私たちに働きかけ、罪を示し、主が救い主であることを指し示してください、信仰の道へと導いてくださいました。そしてイエスを信じた時から、この助け主は私たちに与えられているのです。私たちが聖霊の宮としてくださり、祈りの時にもとりなし祈って下さいます。私たちの内に聖霊の実を結び、主の証人として成長させてくださるのは御霊です。

世は聖霊を見ようともせず、知ろうともしない、無関心ですが、私たちはどうでしょうか。聖霊の助けを求めているでしょうか。助けてもらわなくても自分で何とかなると思っていないでしょうか。まず自分の無力を思い、そのお方を見、知らせていただけるように求めようではありませんか。なお深く主がご臨在くださり、私たちを助けてくださることを期待しましょう。

### 結論

主は弟子たちにも私たちにも、できないことを求められません。しかし主のわざをすすめていくためには、もう一人の助け主である聖霊の助けが必要なのです。任されたつとめを全うさせていただけるように、主の名によって願い求めましょう。

## 研究資料

(辻林和己)

ヨハネ福音書14章は13章に続き、受難週の木曜日の夜に主イエスが弟子たちに語られたことが記されている。主イエスが彼らのために父なる神の家（永遠の住まい）を備えに行かれること（2～3）、ご自身が道、真理、命であること（6～11）を語られた後、祈りと聖霊について語られる。

## テキスト

12 わたしのしているわざ 「わざ」は原語では、(ギ)エルゴン)の複数形が用いられている。主イエスのなされた宣教がいやしのみわざ等のこと。もっと大きいわざ主イエスが地上で歩んでおられたとき、その活動範囲は主にパレスチナの地に限定されていた。宣教の対象も主にユダヤ人であった(マタイ15・24参照)。しかし、主イエスの十字架の死と復活、昇天の後、弟子たちに聖霊が降る。その時以降、福音は世界中の人たち(異邦人世界)に伝えられる。ここで言われる「もっと大きいわざ」とは、主イエスを信じる者たちに託される福音宣教と、そ

れによって世界中の人たちが、救いの恵みにあずかることである。父のみもとに行く 主イエスが昇天され、父なる神の右に着座されること。この後、聖霊降臨の出来事が起こった(使徒1・9、2・1～4参照)。

13 わたしの名によって願うこと イエス・キリストの御名によって祈り、願うこと。なんでも 文字通り何事でも、という意味ではなく、主イエスの教えに従い、神のみこころに適ったことを願うなら何でも、という意味であろう。主イエスの名による祈りは、私たちを主への献身と従順へと促す。そして祈れと命じられる主イエスは、今も父なる神の御前で、私たちのささげる祈りのためにとりなしをしていてくださる(ローマ8・34参照)。かなえてあげよう 原文では、「(わたしは)行う」(ギ)ポイエオー)という意味の動詞の未来形が用いられている。「わたしは…それをしましょう」(新改訳)。父が子によって栄光をお受けになる 御子イエスが弟子たちを通して行われる世界宣教によって父なる神は栄光をお受けになる。

14 願うならば 原文では「わたしに願うならば」と、「わたしに」という代名詞がある。新改訳では「何かをわ



たしに求めるなら」と訳されている。

15 わたしのいましめ 「いましめ」(ギ)エントレー)は原文では複数形。特に、主イエスが弟子たちに与えられる「互に愛し合いなさい」(ヨハネ15・12)という戒め等、神を愛し、隣人を愛することに関わる戒め。守るべきである。「守る」(ギ)テレーオー)は原文では未来形が用いられている。「わたしの戒めを守るはずです」(新改訳)。主イエスを心から愛する者は、その戒めを忘れず、いつも喜んでそれを守ろうとするであろう。

16 わたしは父にお願いしよう 「願う」(ギ)エローターオー)の未来形が用いられている。今、地上におられる主イエスが天の父なる神に向かつて願う、という意味ではなく、主イエスが復活され、昇天し、父の右に座した後、父なる神に願われるという意味であろう。父は別に助け主を送って「助け主」は、原語では(ギ)パラクレートス)で元の意味は、「そばに呼ばれた者」である。それは「弁護者」、「仲保者」等を意味する言葉であり、ここでは「聖霊」のことである。Iヨハネ2・1の「助け主」はイエス・キリストのことであるから、聖霊は「もうひとりの助け主」(新改訳)である。

17 それは真理の御霊である 「それ」は新改訳では「その方」、新共同訳では「この方」と訳されている。聖霊は、真理そのものである主イエスを人々に伝え、主の言葉を弟子たち思い起させてくださる(ヨハネ14・26)。さらに聖霊は私たちが主イエスの戒めを守ることができるように働きかけられ、主イエスに栄光を帰せられる(ヨハネ16・14)。この世は…、それを受けることができない主イエスを信じようとしないこの世の人々は、聖霊を知ることを受け取ることもできない。あなたがたはそれを知っている。主イエスを信じる者には父なる神が聖霊を与えてくださるから、聖霊を知ることができる。ここでの「知る」は、人格的に交わりを持ち、体験として知るという意味が含まれている。それはあなたがたと共におり、またあなたがたのうちにいる。今も、主イエスは聖霊によって、私たちと共にいて下さり、私たちの内に生きておられる。

参考図書 山下正雄「ヨハネの福音書」『新実用聖書注解』、村瀬俊夫「ヨハネの福音書」『新聖書注解 新約1』(以上のちのことば社)、他

## 聖書

ヨハネ14・12～17

## タイトル

聖霊を覚えて歩もう！

## 暗唱聖句

父は別に助け主を送って、いつまでもあなたがたと共におらせて下さるであらう。  
ヨハネ14・16

## 目標

キリストが送ってくださる助け主、聖霊を覚えて生きる。

## 導入

(飯田勝彦)

もし、皆さんの親しい人から亡くなる前に、大切な品を渡されたら、自分もそれを大切にすることでしよう。そして、それを見る度にその人を思い出すでしょう。

今日の個所で、イエス様がこの地上を去る前に、私たちのために送られたものが記されています。それは、イエス様が直接、神様にお願ひしてくださった、聖霊です。イエス様を信じている者には、この聖霊が与えられています。聖霊をいつも覚えて歩みましょう。

## 助け主である聖霊

16節には「わたしは父にお願いしよう。そうすれば、父は別に助け主を送って」とあります。この助け主は聖

霊ですが、誰を助けてくれるのでしょうか。それは、私たちです。聖霊は今も、私たちを助けてくださっています。日頃私たちは、多くのものに助けられて生活しています。どんなものに助けられていると思いますか？その中に法律があります。もし、法律がなければ安心して生活することはできません。そのように、私たちの生活では、気づかないほどに多くの助けがあるのです。

聖霊も私たちを助けてくださっていますが、その実感がありませんか？生活の中で、聖書を読んだり祈ったり、今朝こうして教会学校に来ることが出来たのも、実は聖霊の助けがあるからです。極めつけは、今もイエス様を信じ続けていられるのは、私たちの力によるものではありません。聖霊が私たちを助けてイエス様から離れることがないように働いておられるからです。

## 真理の御霊である聖霊

私たちに与えられている聖霊は、真理の御霊です。真理の御霊は、人間の知恵では理解できない聖書の恵みを分かるように導いてくださいます。例えば、私たちは、自分が罪人であり、そのためにイエス様が十字架で死なれ、復活してくださったと信じていますね。これを、学

校の友だちに話したら、どのような反応があるでしょうか? 「えー、イエス・キリスト? 死んだ者が復活した!? そんな訳ないじゃん」で終わってしまうかも知れないですね。イエス様は救い主と信じる事ができるのは、当たり前のことではありません。自分が罪人であり、イエス様の十字架と復活がなければ生きていけないと分かせてくださったのは、真理の御霊である聖霊によるのです。

この聖霊は、今も確かに働いて私たちをさらに深い真理へと導こうとしておられます。イエス様は「真理は、あなたがたに自由を得させるであろう」(ヨハネ8・32)と言われました。真理が分かる度に、私たちの心は自由になります。

### 共にいてくださる聖霊

イエス様は「わたしはあなたがたを捨てて孤児とはしない。あなたがたのところに帰って来る。」(ヨハネ14・18)と言われました。十字架で死に復活し、昇天されたイエス様は、弟子たちを残して孤児にするようなことはされませんでした。再び来られるときまで、私たちに聖霊を送ってくださいましたのです。聖霊は、いつまでも共に

いてくださいます。私たちを助け続けてくださり、真理を悟らせ、自由を与えてくださいます。

共にいてくださる聖霊は、私たちの内にいてくださると約束されています。思い出してください。イエス様は昇天される前、弟子たちに何と言われたでしょうか?

「見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである」(マタイ28・20)と言われました。イエス様は今、目に見ることはできませんが、内におられる聖霊を通して私たちの内に共にいてくださることを知ることができます。

### まとめ

イエス様は「この世はそれを見ようとせず、知ろうともしないので、それを受けることができない。」(17)と言われました。多くの人は聖霊に関心がありません。でも、イエス様が神様にお願ひして私たちに送ってくださいました聖霊をいつも覚えて歩みましょう。聖霊はあなたを助け、自由にし、共にいて慰め励ましてくださいます。

♪よろこびはわがこころに♪ (ホ132)

# 聖書 ヨハネ14・27～31 テーマ キリストにある平安

## 序論

(石田高保)

イスラエルでの挨拶は「シャーローム」(平安)。かの国は常時戦時体制の中なので、平安、平和という言葉は切実に響きます。私たちも自分の心には平安を、そして人との間には平和を心から願うのではないのでしょうか。

## 一、神との平和による平安

イエス様が天に帰ってしまったら、弟子たちは抛り所を失って、誰に頼ったらよいかわからなくなってしまうことを見越して主は「わたしはあなたがたを捨てて孤児とほしくない」と約束します(18)。彼らが最も必要としていたのは、心の平安です。そんな彼らに主は、「わたしは平安をあなたがたに残して行く。わたしの平安をあなたがたに与える」と遺言されます。主が弟子たちに残された遺産の一つは、「わたしの平安」です。この平安は「世が与えるようなものとは異なる」ものです。世が与える平安とは、順調な仕事、良い評価、良い成績、健康、家庭円満、財産、など。しかしこれらによって支えられ

る平安は危ういもので、何か欠ければすぐに失われてしまいます。しかしイエス様の与える平安は、私たちの心を揺るがす出来事が起きても、決して揺るぎません。太平洋を進む船が台風遭遇すると山のような大波に揉まれて、生きた心地がしないのですが、海面から20メートル下は、まったく動きがないそうです。

## 二、平安を持つためには

ではどうしたらこのキリストの平安を身につけることができるのでしょうか。第一は、神様と正しい関係を持つことによります。人間が不安に悩まされるのは、そもそも神から離れているからです。「わたしたちは、信仰によって義とされたのだから、わたしたちの主イエス・キリストにより、神に対して平和を得ている」(ローマ5・1)。主の十字架によって勝ち取られた平和・平安です。人間の恐れの本根は、罪深いために、聖い神の前に立てない、さばかれる、永遠の死に定められていることを潜在的に知っている所にあります。しかしイエス様を受け入れることによってそこから救われ、神様との間に何のやましいこともなくなり、神の子として受け入れられ、永遠の命にあずかります。それほどの親しい間柄だ

からこそ、日々の悔い改めによって神との関係を正しくし、平安をいただくことができます。

第二は、〈助け主：聖霊〉を心に迎えることによります。聖霊は助け主・パートナーとして、私たちと一緒に働いてくださいます。私たちのほうは聖霊に自分の身を委ねるのです。聖霊が私たちの霊をキリストの平安によって防弾チョッキのようにガード（防御）していて下さいます。「あなたは全き平安をもつてこころざしの堅固なものを守られる。彼はあなたに信頼しているからである」（イザヤ26・3）。イエス様の懷に飛び込んで、後はよろしくお願いしますと委ねれば、主の平安によって覆われるのです。また「何事も思い煩ってはならない。ただ、事ごとに、感謝をもつて祈と願いとをささげ、あなたがたの求めるところを神に申し上げるがよい。そうすれば、人知ではとうてい測り知ることのできない神の平安が、あなたがたの心と思いとを、キリスト・イエスにあって守るであらう」（ピリピ4・6、7）。

ですから私たちは自分に向かって宣言しましょう。（心を騒がせるな、またおじけるな）と。みことばを口にすると、そこに助け主なる聖霊が働いて、イエス様から

の語りかけとなり、私たちの霊が強められます。さて、あなたはもうしたら主の平安を回復できるでしょうか。

### 三、人との平和をもたらず平安

私たちの内にキリストの平安があると、人との間にも平和を造るようになります。私たちの信仰はそもそも、個人の安心立命のためだけにあるのではないからです。内なる平安が外に向かうと平和になると言われます。周りの人々にイエス様の平安をお分かちすることができのです。外に向かい、人のために役立つ平安です。「平和をつくり出す人たちは、さいわいである、彼らは神の子と呼ばれるであらう」（マタイ5・9）、クリスチャンはピースメーカーです。馬が合うとか合わないでぶつかりやすい関係の中に、イエス様の平安を持つクリスチャンが一人いることによって、その場が和らぐことがあります。助け主である聖霊が私たちと一緒に働いてくださるからです。

### 結論

ぜひ、人間関係の悩みを持ち込まれやすい存在となりましょう。さて、どういう関係の中で、どのように平和をつくり出させていたいただきたいと思いますか。

## 研究資料

(辻林和己)

ヨハネ13章から17章まで、「最後の晩餐」の席上とその後でなされた主イエスの弟子たちに対する告別の説教が記されている。14章では、主が地上を去る日の近いことを聞かされて動揺する弟子たちに主が「…心を騒がせないがよい」(1)と命じられ、ご自身が父なる神への道であることを語られる。さらに、主イエスの言葉を弟子たちに思い起こさせる助け主(聖霊)の派遣を約束された(26)。今回の箇所では、主イエスはご自身が世を去るに当たって弟子たちに「平安」を与える約束の言葉を語られる。

## テキスト

27 わたしの平安をあなたがたに与える 「平安」(ギエイレネー)はヘブライ語では「シャローム」。「シャローム」はユダヤ人の間では日常の挨拶でも使われる言葉である。ユダヤ人は何よりも望ましい幸いな状態、神の祝福を受けて互いに喜び合える状態を「シャローム」と呼んだ。主イエスがここで実際に使われた言葉も「シャ

ローム」である。そしてこれはキリストによってなされる救いの結果、弟子たちに与えられる真の平安であるから主はそれを「わたしの平安」と言われる。それは世が与える平安とは違うことを強調される。心を騒がせるな14・1と同じ言葉をもう一度繰り返される。

28 わたしは去って行くが、…帰って来る 14・3、18 参照。わたしが父のもとに行くのを喜んでくれるであろう 27節の平安と共にここでは喜びが語られる。十字架の死と復活の後、主イエスが父なる神のもとに行かれることは、弟子たちにとって大きな喜びとなる。父がわたしより大きいかたである かつて「わたしと父とは一つである」(ヨハネ10・30)と言われた主がここではこう語られる。御子の派遣も、御子の帰還も、一切は父なる神のみ心と御計画の中にあるからである。人となられ、僕のかたちをとられた神の子の今の姿を父なる神と比較して語られた言葉でもある。

29 そのことが起らない先に 13・19 参照。主イエスが十字架で死なれるとき。このことが起こるに先立って、主は弟子たちに語られ、そのときの悲しみと苦しみに耐えることができる希望を与えようされる。事が起った時



に 主が復活され、父のみもとに帰られるとき。

30 多くを語るまい 主が語っておられる間にも、危機は刻々と迫っていた。この世の君 サタン（悪魔）のこと。サタンが主イエスに最後の攻撃を仕掛けようとしている。

31 しかし、わたしが父を愛していることを世が知るように、わたしは父がお命じになったとおりのことを行うのである 父なる神を愛し、従順に歩まれる主イエスに対してサタンは何の力もない。立て。さあ、ここから出かけて行こう 一同が晩餐の部屋（二階の広間）から、この後すぐに出て行つたことになると、15〜17章は、ゲツセマネへの途中で語られたことになる。一方、この言葉の後も、すぐに出かけないで同じ部屋で主が弟子たちに語り続けられたとする説もある。また「さあ、…出かけて行こう」と訳されている言葉（ギアゴーマン）には、「近づく敵を迎え撃とう」、「（サタンに）立ち向かおう」という意味があるとして、主イエスが、今、悪魔に立ち向かい、その死に向かって進もうと言われたとする説もある。主が去って行かれると聞き、「心を騒がせ、おじける」弟子たちに、主が残そうとされたのは、不安や恐れに打

ち勝つ「平安」であった。ヨハネによる福音書では、27節と同じ意味で、この語がもう一度、16・33で用いられる。そのあとは、復活のキリストにより、「安かれ」（新改訳聖書では「平安があなたがたにあるように」と語られる（20・19、21、26）。このように主イエスが約束された「平安」が完全に弟子たちに与えられるのは、主がサタンに打ち勝たれ、十字架と復活の出来事によって、ご自身の愛を究極的に現されるときである。

私たちも、主イエスを信じ、心に受け入れるとき、聖霊が内に住んで下さり、御霊の実として「平和」が与えられる（ガラテヤ5・22）。ここでの言葉「平和」は、27節の「平安」と原語は同じ、（ギ）エイレネーである。主が与えて下さる喜びと同様、キリストの平安は、誰も取り去ることはできない（ヨハネ16・22）。

参考図書 村瀬俊夫『ヨハネの福音書』『新聖書注解』（いのちのことば社）、榊原康夫『ヨハネ福音書講解』（小峯書店）他



## 聖書

ヨハネ14・27〜31

## タイトル

本当の平安

## 暗唱聖句

わたしは平安をあなたがたに残して行く。わたしの平安をあなたがたに与える。

ヨハネ14・27

## 目標

どんな状況の中にもキリストからの平安を持って生きる。

## 導入

(後藤 真)

きょう読んだ聖書に出てくる「平安」というのはふだんつかわない難しいことばですね。辞書で調べると「心が安らかなこと」と出てきます。どんなときにも心が安らかなでいられたらいいですね。イエス様が弟子たちに教えたことばから、ほんとうの「平安」を教えてくださいましょう。

## 十字架にかかる前に

イエス様は弟子たちに、たくさんのお話をしました。イエス様が弟子たちにお話しできる時間はあまり残っていなかったからです。なぜでしょうか。イエス様がもうすぐ十字架にかかるという時だったからです。イ

エス様はこれまで弟子たちに何度か、十字架にかかることと三日目によみがえること、そしてそのあと弟子たちの前からいなくなることをお話ししてきました。でもイエス様はいなくなつたままではありません。もういちど帰ってくることに、イエス様の代わりに聖霊という助け主を送ることを約束してくださいました。弟子たちが、イエス様がいなくなつた時に心配しないように、前もって教えてくださったのです。

## あなたがたに平安を与える

イエス様は弟子たちに言いました。

「わたしはあなたがたに平安を与えるよ。わたしが与えるのは、この世の平安とは違うものだ。だから、心を騒がしたり、怖がったりしないでいいんだ。『わたしは去っていくが、もういちど帰ってくる』言ったことも覚えていよう。」

イエス様がいないといういちばん心配な時、いちばん大変な時に、それでも心が安らかでいられる平安とはどのような平安なのでしょう。

それはこの世の平安とは違うものです。わたしたちのまわりの人たちはどんなことで安心するでしょうか。お

3月

## 8日 礼拝メッセージ例

金があれば安心という人もいます。体が元気で病気がなかったら安心という人もいるでしょう。学校でいい成績を取っているから将来安心という人もいれば、仕事で成功しているから安心という人もいます。家族のきずながあるから大丈夫という人もいますし、仲がいい友だちがいるから心配ないという人もいます。

たしかにそういったことはわたしたちがつらい時や苦しい時に助けになります。でも、それはいつかなくなってしまうことがあるものです。それにイエス様が見えなくなってしまうたら、弟子たちにとってお金がなんの助けになるでしょうか。お金も、からだや心の健康も、家族や友だちも、イエス様の代わりにはならないのです。

### 神様につながつて

「平安」ということばの根っこには、「神様と正しくつながっている」という意味があります。イエス様がくださる平安は神様とつながっているところから生まれる平安です。

神様はどんなときにも変わることがありません。そして、神様はわたしたちを愛していていちばん良いものをごくださる方です。「神様が何をしてくれるのか」という

ことばかり考える人は、自分の思った通りにならないとすぐに平安がなくなります。でも「神様はわたしにいちばん良いことをしてくださる方だ」と、神様を信用し、神様に任せられる人はどんなときにも平安があります。たとえイエス様が見えなくなっても、弟子たちがイエス様のことを信じて、神様を信用するなら、ここに安らぎがくるのです。

神様を信用するためには、神様と親しくすることが大切です。罪があると神様の前に出たくないなと思ったら、神様が怖く感じます。罪を悔い改めて、赦していただきましょう。また、イエス様が約束してくださった助け主、聖霊の働きを信じましょう。聖霊は、わたしたちに聖書のことばをわからせてくださったり、何かを決めたり何かをしたりするときに、導いてくださったりします。神様はいつもわたしたちといっしょにいて、本当の平安を与えてくださるのです。

♪平和、川のように♪（リビングブレイズ2  
48、ゴ  
スペル・ミュージック・ベスト・ヒット集44）

# 聖書 ヨハネ15・1～8 テーマ ぶどうの木なるキリスト

## 序論

(小泉 創)

現代では、いつもつながっているということが当たり前になってきました。LINEやフェイスブックを通して家族や友人とつながっていたいと思います。それは便利でうれしいことです。

それでは、主イエスと私たちとは十分につながっているでしょうか。つながっていたいと願っているでしょうか。

## 一、つながっていない

主イエスが十字架におかかりになる前の晩に、弟子たちに語られたのは、ご自分がまことのぶどうの木、父なる神は農夫、そしてイエスを信じる弟子たち、つまり私たちは、ぶどうの木の枝というたとえです。木から離れた枝にはいのちがありません。枯れていくだけです。主イエスは「わたしにつながっていないさい」と、弟子たちに命じられました。一度主を信じさえすれば、あとは何

もしなくても大丈夫ということではありません。イエスに対する信仰（信頼）を持ち続ける必要があります。教会に來た時だけ、クリスチャンと一緒にいる時だけ、聖書を読んでいる時だけ、祈っている時だけのことではありません。家庭でも、学校でも、職場でも、クリスチャン同士でない人間関係の中でも、いつでもどこでもかわらずにです。主イエスは、「わたしにつながっていないさい。そうすれば、わたしはあなたがたとつながっていない」と約束してくださいました。私たちがつながろうとするとき、主の方から私たちと力強くつながってください。

## 二、実を結ぶ

ぶどうの木にはぶどうがなります。みかんの木にはみかん、りんごの木にはりんごがなります。キリストが木で、弟子である私たちがつながっているなら、そこには何があるでしょうか。きっとキリストの弟子にふさわしい実があるはずです。それはたとえば「義の実」(ピリピ1・11)、「福音宣教の働きの実」(コロサイ1・5～10)、「御霊の実」(ガラテヤ5・22～23)等です。

本来、外に投げ捨てられて枯れてしまうはずだった私たちを、主イエスは救い出してくださいました。尊い代価を払って、滅びの中から買い取られた私たちは、主イエスにつながって実を結ぶ生涯をスタートしたのです。今まで主と共に歩んでこられたあなたに、主はどのような実を結ばせてくださったでしょうか。そしてこれからどのような実を結ばせようとしておられるのでしょうか。主に大いに期待いたしましょう。

### 三、栄光のために

ひよっとしたら、いつでもどこでもへわたしにつながっていないさい」と言われるのは、窮屈に思うときもあるかもしれませんが。かつては思うがままに自己実現、自分の夢を追いつめてきた私たちです。しかし、そのような生き方は私たちにどのようなものをもたらしたことでしよう。求めるものを手に入れられなかったときには失望し、人をうらやんだり、逆に手に入れたときには高ぶって人を見下げたりもしました。どちらにしても満ち足りない思いに支配されていました。

父なる神は農夫のように愛情をもって、二十四時間世

話をしてくださいます。本来ならば何一つできなかった私に、豊かな実を結ばせてくださるという祝福を約束してくださいました。〈なんでも望むものを求めるがよい〉と言っていただけとは、何と素晴らしいことでしょう。私たち自身がほめられるのではなく、そうしてくださった神に、栄光がささげられるということです。

主イエスは、〈あなたがたがわたしにつながっており、わたしの言葉があなたがたにとどまっているならば〉とおっしゃいました。主の言葉が私たちの内にとどまっていることが大切なのです。そのみ言葉はどのようなときも私たちを生かし、キリストにふさわしく整えてくださいます。

### 結論

私たちとつながることを喜んでくださる主に、いつでも、どこでもつながっていきましょう。そして主の助けによって実を結び、栄光をささげる生涯を歩ませていただきますように。

## 研究資料

(辻林和己)

ヨハネ15章は、「最後の晩餐」(13・1～30)の後、主イエスが弟子たちになされた説教の一部が記されている。今回の個所はヨハネ福音書の特徴をなす「わたしは…である」(ギ)エゴ・エイミ)の形式の七番目の語句が語られている。主イエスが弟子たちの内におり、彼らが主イエスの内におることはヨハネ14・20で既に述べられたが、ここではそのことがぶどうの木と枝との関係にたとえられている。

## テキスト

1 わたしはまことのぶどうの木、わたしの父は農夫である 「ぶどうの木」はイスラエルの民の象徴である。詩篇80・8で詩人は、神が民をエジプトの地から約束の地カナンへと導き出して下さったことを回想している。イザヤ5・3～7は、イスラエルが神の願いに反して悪しきぶどうの実を結んでしまったことを告げる。しかし、主イエスは「わたしは(このわたしこそ)まことのぶどうの木」であると語られた。「まことの」の原語(ギ)

アレクサイノス)は、ここでは模型に対する実物を指す意味で用いられている。主イエスこそ神の約束を真実に実現されるお方である。ここでは「わたしは…である」に「わたしの父は農夫である」という言葉が付加されている。主は、父なる神を農夫にたとえられた。

2 父がすべてこれをとりぞき 「とりぞく」(ギ)アイロー)を「(ぶどうの木の枝を)剪定する」と解釈すれば、6節の最後の「さばき」を宣言する言葉と呼応している。これとは逆に原語には「支える」という意味もあり、父なる神が実を結ばない枝を支え、持ち上げてより多くの空気と光に触れさせて下さると肯定的に解釈する説もある。当時のユダヤの国のぶどうは現在の日本のものと違い、地に這わせていた。これをきれいになさる「きれいにする」(ギ)カサイロー)。Iヨハネ1・9の「きよめる」と同じ語根の言葉が用いられている。

3 わたしが語った言葉 これまでに主イエスが弟子たちに語り続けて来られた言葉。既にきよくされている「きよい」の原語は形容詞(ギ)カサロス)。2節の動詞(ギ)カサイロー)との関連でこの言葉が用いられている。

4 わたしにつながっていない 「つながる」は(ギ)

メノ」で「とどまる」「宿る」等の意味も持つ。新改訳では「わたしにとどまりなさい」と訳されている。私たちがしっかりと留まるべき場、それはまことのぶどうの木なる主イエスである。この勧めは、わたしに対する信仰（信頼）を持ち続けなさいという主のご命令であり、呼びかけである。枝が幹から流れてくる樹液によって伸び、成長するように、私たちキリスト者は主イエスを通して、神の愛とみ言葉をいただいて生きる者である。

**5 その人は実を豊かに結ぶようになる** 新約聖書で語られている「実」は、「義の実」（ピリピ1・11）、「福音宣教の働きの実」（コロサイ1・5～10）、「御霊の実」（ガラテヤ5・22～23）等。弟子が自分の努力で実を結ぶのではない。実を結ばせて下さるのは主イエス。

**6 投げ捨てられ、焼かれてしまう枝は、主を裏切るイスカリオテのユダや主イエスを受けない祭司長、律法学者たちの将来を暗示している。**

**7 なんでも望むものを求めるがよい** 「求める」とは父なる神に祈り求めること。主イエスを信じ、聖霊による主の内住の恵みをいただいたキリスト者（ガラテヤ2・20、4・6、コロサイ1・27等）の祈りは、神の右

に座しておられる主イエスご自身のとりなしの祈りと共に父なる神のもとに届けられる。

**8 わたしの弟子となるならば** 原文では「なる」（ギノマイ）の不定過去接続法が用いられている。主イエスの「弟子である」という状態を表わす言葉ではなく「弟子となる」と、より能動的、積極的な意味が込められた言葉が用いられている。キリスト者は、常に主の「弟子となる」、「弟子となりつつある」存在である。**わたしの父は栄光をお受けになるであらう** 主イエスに従う者が見言葉によって主イエスにしっかりとつながり、多くの実を結ぶとき、栄光をお受けになるのは、父なる神である。弟子たちを通して顕されるキリストのみわざの輝きは、父なる神の栄光に他ならない。

**参考図書** 船本弘毅「ヨハネの福音書」『説教者のための聖書講解』（日本基督教団出版局）、村瀬俊夫「ヨハネの福音書」『新聖書注解』（いのちのことば社）、他

聖書

ヨハネ15・1〜8

タイトル

つながっている？

わたしはぶどうの木、あなたがたはその

枝である。

ヨハネ15・5

目標

どんな状況の中にもキリストからの平安  
を持って生きる。

導入

(後藤 真)

ぶどうはとてもおいしい果物ですね。甘くておいしい  
実を結ぶためにはとても大切なことがあるのです。その  
秘密は为什么呢？

ぶどうの木

イエス様は弟子たちに言いました。

「わたしは本当のぶどうの木、父（神様）はぶどうの  
世話をする農夫なんだよ。」

イエス様が住んでいたイスラエルには、ぶどうの木が  
たくさんありました。弟子たちはすぐに、実をたくさん  
ならせるためにいっしょけんめいぶどうの世話をして  
いる農夫の姿を思い浮かべました。農夫である神様が実  
を結ばせようと世話をしてくださる。自分たちがそん

なに大切にされていると思うととてもうれしいきもちに  
なります。

イエス様は続けて言いました。

「枝がぶどうの木につながっていないければ、自分だけ  
では実をならせることはできないでしょう。」

「そんなの当たり前だ。切った枝にはぶどうの実はな  
らないさ。」と、弟子たちも思ったでしょう。イエス様は  
言いました。

「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝です、わ  
たしにつながっていないさい。そうしないと、あなたがた  
は自分で実を結ぶことはできません。でも、わたしにつ  
ながっていれば、その人は実を豊かに結ぶようになります。  
す。わたしから離れては何もできませんよ。」

「イエス様につながってほしい、実を結びたい」弟子  
たちもそう思ったのではないのでしょうか。

つながっている？

では「つながっている」というのはどういうことでしょ  
うか。みんなで手をつないでいることでしょうか。学校  
で同じクラスになり、仲良くなったらつながっているとい  
うことでしょうか。それもつながっているということ



かもしれません。でも、ぶどうの木と枝がつながっているということは、そういうつながりかたとは大きく違います。手をつないでいても、離してしまうとつながらなくなります。仲良くなった友だちも、クラスが変わったり引越したりして、あまり遊ばなくなってしまうば、つながらなくなります。

でも、ぶどうの木と枝はいのちがつながっています。根っこから入った水や養分が木から枝に送られます。枝は木がなければ生きていきません。木から栄養が送られてこなければ実を結ぶことはできません。木から切り離された枝は枯れてしまうのです、

イエス様につながっているというのは、イエス様といのちがつながっているということです。ただイエス様のことを知っているだけではありません。ただ教会に行っているというだけでもありません。イエス様を通して永遠のいのちをいただいているということです。またイエス様を通して神様の子ともとされているということです。

イエス様につながっているひとは、自分勝手に生きることとはしません。イエス様のことばや聖書のことばが、

栄養のように心に入ってきます。そうすると、イエス様を喜ばせたい気持ちになってきます。すぐに怒る人が優しくなったり、わがままだった人が他の人のことを考えるようになったりします。そして、友だちにイエス様のことを教えたい気持ちになってきます。イエス様につながっている人はそういう素晴らしい実を結んでゆくのです。みなさんはイエス様につながっていますか？

### あなたがたは枝

イエス様は「あなたがたはその枝です」と言いました。イエス様はこのことを一人だけではなく、弟子たちみんなに話しました。ペテロだけが枝だとか、ヨハネだけは実を結びなさい、ということではありません。ぶどうの木は一本の木からたくさん枝が伸び、たくさん実を結ぶのです。

イエス様の願いは、わたしたちみんながイエス様につながり、みんなで実を結ぶことです。みんなでイエス様につながり、みんなで実を結ばせていただきます。

♪主はぶどうの木♪（リビングプレイズ17、新聖歌332）

# 聖書 ヨハネ15・12・17 テーマ 最大の愛

序論

(石田高保)

驚くべきことに、神様は私たちと親しい友人になりたいと願っておられます（人がその友のために自分の命を捨てること、これよりも大きな愛はない。あなたがたにわたしが命じることを行うならば、あなたがたはわたしの友である）。主はご自分の命を十字架に投げ出すことによって、私たちをどれほど愛しているか、どれほど大切に思っているかを示して下さいました。神に愛されていない人は、この世界に一人もいません。神様との関係を表現する言葉として馴染み深いのは、父と子、主人と僕、羊飼いと羊などではないでしょうか。しかしイエス様は「わたしはもう、あなたがたを僕とは呼ばない。僕は主人のしていることを知らないからである。わたしはあなたを友と呼んだ」。天地万物を創造した全知全能の父なる神様が、私たちのレベルまで降りて来られ、何もかも話し合える親友になって下さるとは、誰が想像できたでしょうか。アブラハムやモーセは「神の友」と呼ばれ、

エノク、ノア、ダビデ、ヨブも神と親しく歩みました。今、私たちも神様との友情を深めることができるのです。

## 一、神さまと会話の祈りをする

私たちはいつでも、どこでも、神様に呼びかけ、語りかけることができます。「絶えず祈りなさい」とはそのことを言っています。もちろん、神様と二人だけになって聖書を読んで祈る習慣は身につけたいものです。神様もその時間を楽しみにしておられます。しかし神様は、私たちと一日中、一緒に過ごしたいと願っておられます。ユダヤ人は一日3回、イスラム教徒は5回祈るようですが、クリスチャンは「絶えず祈れ」ですから一日中です。何をしても、その場に神をお招きし、その臨在を意識することです。「だから、飲むにも食べるにも、また何事をするにも、すべて神の栄光のためにすべきである」（Iコリント10・31）。仕事に没頭している時でも、勉強している時でも、車を運転している時でも、買い物をしている時でも、家事をしている時でも、趣味に打ち込んでいる時でも、折に触れて「イエス様！」と呼びかけるなら、そこで神様と一緒に過ごすことになります。ぜひ、打ち解けた短い会話のような祈りをしてみてください。

「わたしと共にいてくださって、ありがとうございます」「あなたはわたしの主です。わたしはあなたのものです」「これから出かけますが、一つよろしくお願いします」「わたしを悪魔の誘惑攻撃から守ってください」「主よ、あなたを信じます」など。さて、絶えず祈るために、できることはどんなことでしょうか。

## 二、みことばを思いめぐらせる

神様は私たちの友として、ご自分がどれほど私たちを愛しているか、どんなに恵み深いかを教えたいと願っておられます。また神様は私たちに賢く生きるための知恵を与えたいと願っておられます。それは聖書の言葉を通してです。

かつて神はアブラハムに、ソドムとゴモラにさばきを下さなければならぬことを伝えました。「わたしのしよととする事をアブラハムに隠してよいであらうか」(創世記18・17)。また神は預言者エレミヤに、国の将来に起きる出来事を教えてくださいと祈るように言われました。「わたしに呼び求めよ、そうすれば、わたしはあなたに答える。そしてあなたの知らない大きな隠されている事を、あなたに示す」(エレミヤ書33・3)、神が必要と

認めれば、未来に関することでも教えてくださいます。人類のおおよその未来については、黙示録に記されています。しかし実際のなところとしては、日常生活の中で、どのように人と関わったらいいか、さまざまな課題にどう取り組んでいったらよいかという知恵を必要としています。それを神様はみ言葉をとおして教えようとしておられるのです。私たちがみ言葉を思いめぐらす習慣を身につけると、神はその知恵を与えてくださるようになります。折にふれて気づきが与えられるようになります。人との関わりにおいて、タイミンを外さなくなります。そもそも私たちが神から選ばれたのも、私たちがおしえて神の栄光が現されるためです。(また、あなたがたがわたしの名によって父に求めるものはなんでも、父が与えて下さるためである)。

## 結論

主日の礼拝で開かれたみ言葉を一週間かけて覚え、折にふれて思いめぐらしましょう。また自分自身と生活に当てはめてみましょう。それを信仰の友との間で分かち合ってみましょう。さて、折にふれてみ言葉を思いめぐらすために、どのような工夫ができるでしょうか。

## 研究資料

(小平徳行)

ここにはキリスト者相互の関係について記されている。キリストのうちにとどまり、キリストがご内住下さるならば、互に愛し合うように導かれる。

## テキスト

12 わたしのいましめは、これである 10節のいましめがここで取り上げられ、明確にされている。主の愛のうちにとどまるために、また主につながり続けるために必要なことは、主のいましめを守ることである。そのいましめの第一のものが、互に愛し合うことであつた。わたしがあなたがたを愛したように 主の愛は、私たちが互に愛し合うことの根拠であり、その力の源泉であり、その愛の模範である。キリストは、私たちがまだ罪人であつた時に、また私たちが敵であつた時に、愛して下さつた(ローマ5・8、10)。

13 この言葉は、一般的なことわざではなく、12節の主の愛の説明であり、十字架の愛をさしている。これよりも大きな愛はない これが最大の愛として、互に愛することの最高のあり方、愛のモデルを示している。命を捨

てる これは殉教の死を遂げることや、身代わりに死ぬという意味においてのみ理解する必要はない。捨てる(ギ)ティセーミ)は「投げ出す、差し出して提供する」などの意味があり、自分の命を自分だけのためにではなく、隣人にささげられたものとして生きていくことが含まれている。

14 あなたがたにわたしが命じることを行うならば、あなたがたはわたしの友である ここには主の友であることがいかにして実現されるのが語られている。友であることは主の命じることを行うことにおいて遂行される。神はアブラハムを「わが友」と呼んだ(ヤコブ2・23)。アブラハムは友として神と交わりをもつただけでなく、ひとり子イサクをささげよとの命令でさえも従つた。友(ギ)フィロス)は愛する(ギ)フィレオー)から来ている。ゆえに主が「友」と言う時、「愛される人々」と言う意味が込められている。また、本節と14・15、21と比べると、友となることと愛することとは同義であることが分かる。

15 わたしがもう、あなたがたを僕とは呼ばない。僕は主人のしていることを知らないからである 当時、主人

が僕に何かを相談することはなく、僕は自らにゆだねられている働きがどのようなものであり、また何を目標としているのか、どのような意味があるのか知らずに、ただ主人の命ずるままを行うことしかできなかった。しかし友であるとは、強制されてでも機械的でもなく、主のことばを悟り、喜んで行う者ということである。**わたしはあなたがたを友と呼んだ** 神が私たちに近づき、引き寄せてく下さらない限り、威光と尊厳に満ちておられる聖なる神に対して親しげに近づくことは本来できることではない。したがって、主が私たちを友と呼んで下さることは、大きな恵みであり、そこに神のへりくだりと御愛とが現れている。**わたしの父から聞いたことを皆、あなたがたに知らせたからである** 弟子たちを友と呼んだ理由がここに挙げられている。主は最後の晩餐の席上でその胸中を残らず告げられた。神はアブラハムに対して、ご自身がなさろうとしておられることを前もって告げられた(創世記18・17)。またモーセに対して、自分の友と語るように顔を合わせて語られた(出エジプト33・11)。主は私たちにご自身の深い心を知らせることのできるような関わりをもつことを望んでおられる。

16 **あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだのである** 主との親しい交わりに導かれたのは、弟子たちが選び取った結果ではなく、主が弟子たちを選んで、その使命を託すべき器とされた結果である。救いはこの選びによるのであり、恵みの賜物である。**あなたがたが行って実をむすび** 主が選んでくださった目的は、キリスト者が主の弟子として実を結ぶことである。その実の一つが、主がなされたように兄弟姉妹を愛することである。**その実がいつまでも残るためであり** 実の永続性は教会の永久的な性格を示唆している。**あなたがたがわたしの名によって父に求めるものなんでも、父が与えて下さるためである** 私たちに豊かな実を結ばせて下さるのは神である。実を結ぶ事ができるのは、神が御子の名による祈りに答えて下さることによる。実を結ぶ生涯には深い祈りが伴う。

**参考図書** 村瀬俊夫「ヨハネの福音書」『新聖書註解・新約1』、B・F・バックストン『バックストン著作集第8巻 聖書講解Ⅳ―ヨハネ福音書講義下』(以上、いのちのことば社)、G・R・オデイ『NIB新約聖書注解5・ヨハネによる福音書』(ATD・NTD聖書注解刊行会)他。

## 聖書

ヨハネ15・12～17

## タイトル

最も大きな愛

## 暗唱聖句

人がその友のために自分の命を捨てること、これよりも大きな愛はない。

ヨハネ15・13

## 目 標

十字架に示されたキリストの愛を知り、愛に生きる者となる。

## 導入

(松浦みち子)

皆さんの聖書は日本語で書かれていますね。しかし、もともと旧約聖書はヘブル語、新約聖書はギリシャ語で書かれています。「愛」という語は日本語ではひとつですが、ギリシャ語は4種類に分けられるのです。①エロス(男女関係の愛) ②フィリア(友情愛) ③ストルゲ(親子愛、師弟愛) ④アガペー(神様の愛、無条件の愛)

今日は、神様の愛、アガペーを学びましょう。

## 神様の愛とは？

聖書の中にはっきりと書いてあります。「しかし、まだ罪人であった時、わたしたちのためにキリストが死んで下さったことによって、神はわたしたちに対する愛を

示されたのである。」(ローマ5・8)と。

神様は、わたしたちの罪を赦すために大事な独り子イエスを身代わりとして十字架につけて下さったのですね。ここに神様の愛が示されています。

## 互いに愛し合う

イエス様はいよいよこの世を去る時が近づいたとき、弟子たちと最後の夕食をされました。その時、「わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互に愛し合いなさい。人がその友のために自分の命を捨てること、これよりも大きな愛はない。」と語られました。互いに愛し合うことは、気の合った仲間同士の愛ではありません。互いに仕え合うことです。この事はイエス様の愛を学ぶより方法がありません。イエス様ならどうなさるだろうと思うことは大切な事です。さらに、イエス様は弟子たちを友と呼び、父なる神様から聞いたことを親しく知らせたと言われました。そして、弟子たちをこの世から選び、福音を宣べ伝えるために選り任命したと告げられました。それは、彼らが互いに深い絆で結び合わされ、豊かに実を結び、喜びのうちに歩むためです。わたしたちもイエス様の十字架の愛をしつかりと心に刻みつ



け、友のため、祈り、助け、励ます者と変えられました。愛し合う姿は、わたしたちがイエス様の弟子であることを、世の人が認めるしるしとなるのです。

### ドイツ画家デューラー「祈りの手」

有名な「祈りの手」のエピソードをお話ししましょう。今から五百年ほど前、ドイツのある町にデューラーとハンスという若者がいました。二人とも貧しい家に生まれ小さい頃から画家になりたいという夢をもっていました。しかし、貧しくて絵具や筆などの画材をかうお金がありません。ある時、ハンスがデューラーにひとつの提案をしました。「このままでは二人とも画家になれないだろう。僕たちのどちらかが働き、そのお金で一人ずつ交代で勉強しよう。僕が先に働くからデューラー、きみが先に勉強してほしい。」ハンスの言葉に感謝して、イタリアのベネチアに勉強に行きました。それからハンスは、お金のたくさん稼げる炭鉱に行つてハンマーを振り続け、せっせせっせとお金を送りました。一年二年と時は流れ、やっとデューラーは画家として認められ、売れた絵のお金をもって今度はハンスの番だと急いで帰ってきました。二人は手を取り合つて喜びました。ところ

が、ハンスは「おめでとう。本当によかった。でも僕はもうだめなんだ。炭鉱の仕事で指も曲がり、手も震えて、絵筆も握れないんだ。」デューラーはショックを受けて「僕のために……きみは犠牲になつて……すまない」とフラフラとハンスの家を出て行きました。自分の成功が友だちの夢を奪つたことを思い悩みながらも、もう一度ハンスを訪ねました。「何かできることはないだろうか。少しでも償いがしたい」とドアを開け中に入ると、祈りの声が聞こえてきました。「神様、デューラーはわたしのことで傷つき、苦しんでいます。どうか、デューラーがこれ以上苦しむことがありませんように。そして、わたしが果たせなかつた夢を彼が叶えてくれますように。あなたの守りと祝福がいつもありますように。」祈りが終わったあと、涙ながらにハンスに懇願しました。「きみの手を描かせてくれ。きみのこの手のおかげで、今の僕はあるんだ。きみのこの手の祈りで僕は生かされているんだ！」デューラーは、自分のために犠牲を払つて働き、祈り続けてくれた友だちの手を心を込めて描いたのです。（祈りの手の絵を用意して下さい）

♪両手いっぱい愛♪（新聖歌483、ホ146、イン41他）



# 聖書 ヨハネ16・19〜24 テーマ キリストの名による祈り

## 序論

(石田高保)

この箇所はイエス様が十字架にかかれる前の日に弟子たちに語られたものです。彼らはこれからイエス様がただならぬ決断をしようとしておられることを肌で感じたのですが、それが何なのかわからないために不安に駆られてお互いに論じ合っていました。わかることはイエス様が父のみ許に行かれることでした。ここでイエス様が伝えようとしていたことは何でしょうか。

## 一、聖霊の約束

イエス様は「しばらくすれば、わたしを見なくなる」と言われましたが、これが弟子たちにはさっぱりわかりませんでした。確かにイエス様はこれ以上具体的に説明をしてはおられませんが、弟子たちもペンテコステ以降、聖霊を受けてからはよく理解したのではないかと思われます。しかしこのときはまだ聖霊が降っていないかったのだで彼らが理解できなかったのも無理はなかったでしょう。今日、聖霊の光に従って聖書を読むとき、わたしを

見なくなるとは、復活して40日後に天に昇られる、いわゆる昇天の出来事と思われます。復活のおからだが見えなくなるのは昇天のときだからです。雲に吸い込まれるようにして天に昇ってゆかれました。そのとき弟子たちはイエス様が見えなくなってしまうのでとても心細くなりました。これが「泣き悲しむ」、「不安」の意味するところです。このとき「この世は喜ぶ」と言っておられますが、主を拒む人々は、天下を取ったように喜ぶということです。

また「しばらくすればわたしに会えるであろう」という意味は、昇天から10日目に聖霊が降って、イエス様を受け入れる人すべてに聖霊が与えられるようになることです。そのとき「その憂いは喜びに変わるであろう」、「喜びに満たされるであろう」。弟子たちはイエス様が見えなくなつたために不安に陥っていました。聖霊が降ってから見ないで信じて喜ぶ生き方が始まったのです。次のみことばがその辺の事情をよく解き明かしています。「あなたがたは、イエス・キリストを見たことはないが、彼を愛している。現在、見てはいないけれども、信じて、言葉につくせない、輝きにみちた喜びにあふれている。

それは、信仰の結果なるたましいの救を得ているからである（1ペテロ1・8、9）。私たちは内におられる聖霊によってイエス様を見えなくても信頼できるのです。（その喜びをあなたがたから取り去る者はいない）ので、私たちはいつも喜んでいることができます。苦しいときも寂しいときも傷ついたときもやりきれないときもです。

## 二、祈りの保証

キリストの名によって求める（祈る）とはどういうことでしょうか。お祈りの最後に、イエス様のお名前によって祈ります、と付け加えますが、これはイエス様の執り成しによって父なる神様に祈りを届けていただくという意味です。主は「わたしは道であり、真理であり、命である。だれでもわたしによらないでは、父のみもとに行くことはできない」と言われました（ヨハネ14・6）。人間が神に近づくための唯一の道は、イエス様ご自身です。イエス様の贖いによって罪を赦してもらわなければ、どのような善行努力を積んでも神に近づくことは不可能です。つまりイエス様を迂回して神様のもとに行くことはできません。ですから私たちが祈るときもイエス様のお名前により頼む必要があるわけです。そして主の

名によって求めるものは何でも与えられると保証しておられます。そして喜びが満ちあふれると約束しておられます。そして祈りがこたえられるとき、主は確かに生きておられると再確認できて喜ぶのです。

ただしこの何でもとは、神の栄光を現すものに限られることは押さえておかねばならないでしょう。とうぜん何でも自分の思うとおりになるというわけではありません。神様は私たちの欲しいものをくださるとは限りませんが、必要なものはぜんぶくださる、という言葉があります。ほしいものと必要なものを区別しましょう。

さてイエス様の名による祈りは、神の国の拡大のために力を発揮します。主は私たちが生活の現場で輝くために、祈りをもって事に臨むことを求めておられます。そして私たちの祈りにこたえたいと願っておられます。それは福音の前進がなされるからです。

## 結論

主ご自身も天において祈っておられます。私たちはその祈りのパートナーとして用いられます。キリストの名による祈りの効力の絶大さを信じて、事の大小にかかわらず、祈りの生活に励んでまいりましょう。

## 研究資料

(加藤 満)

ヨハネにおいてイエスは祈りを弟子達に教える上で、彼らに祈禱をどう考えるかとか、その結果についてどうであるかと言った事に触れてはいない。彼らがイエスの名において願えば、イエスはするようにされる(14・13、14、15・16、16・23、24)。

またイエスの祈りはこの福音書において一貫している「一致」の主題を反映している(15・7)。父なる神が御子イエスを愛し(15・9)、御子が御父を愛して(14・31)いる。同じ種類の愛で弟子達はイエスを愛し(14・21)、互いを愛するように(15・12、14)、と神の愛に参加するように招く。その中に祈りに関する言葉が交わされている。イエスが神と一致して祈るように、彼らも神と、イエスと一致し、その親密な愛の交わりの中で「祈り」は描かれている。

## テキスト

19 **しばらくすれば** 二度繰り返されるが、前半の「見なくなる」の時刻は現在で、「会えるであろう」は未来。イエスを見られなくなる時が来るが、遂には再会できる

と言う意味。イエスの死と復活の間を指している。

20 **よくよくあなたがたに言っておく** 重要な真理を告げる際の導入定式。**泣き悲しむ** エレミヤ22・10などの『旧約聖書』の挽歌に由来する激しい言葉である。地上に残された弟子達を襲う激しい慟哭が暗示されている。しかし、そのような彼らの痛みを「この世」は喜ぶ。神は「この世」を愛された(ヨハネ3・16)と比較される。**憂いは喜びに変わる** 弁護者である聖霊なる神は、共同体の内に喜びを生み出す。また、イエスが昇天されなければ、助け主は来られない(ヨハネ16・7)。

21 **女が子を産む場合には** 解放の喜びを味わう前に経験する短い苦悩の時期を、旧約の預言者達はしばしば陣痛に例えている(ミカ4・9、10)。彼らは特にこの比喩をイスラエルが苦難から解放されて新しい生活に入る事に關して用いた。それゆえ、イエスが死によって死を打ち破り、贖われた人々が永遠の命を持つことを可能にし、死人の中からよみがえられたという最も大いなる解放を表現するには最適である。

22 **その喜びをあなたがたから取り去る者はいない** この世は十字架によってイエスに勝利したと錯覚し、弟子

達は嘆き悲しむ。しかし、イエスはここで友に対し確証するように、彼らの悲しみが復活によって奪われることのない喜びに変えられると告げる。ちょうど女性が母親になり、一人の人間の新たな誕生の喜びに産みの苦しみをおぼえるように。彼らは今の時、先の見えない不安や苦痛は、喜びによって忘れ去られる時が来ると告げている。

**23 その日** 復活とそれに続く日々を指している。あなたがたがわたしに問うことは、何もないのであろう。復活の後に聖霊なる神により、弟子達は新しい命の喜びを味わい、かつて疑心暗鬼であった彼らは確信に満ちあふれる。「尋ねる」(ギエロータオー)は問いかける時だけでなく、「求める・願う」など好意を求める時にも用いられる。また、「わたしに」はギリシャ語で強調の位置に置かれ、「わたし」から「父」への視点の移動が見える。ニュアンスは「あなた方はもはや私に求めません。あなたがたは父に向かって祈ることになります」。わたしの名によって 名はその実体・存在を示す。「御名による祈り」は、イエスと一体となり、イエスの権威に基づく祈りである。本来、罪ある人間は聖なる神に近づき祈ることができない。しかし「御名のゆえに」。即ち、過去における

イエスの十字架における勝利、現在におけるイエスのとりなしのゆえに、大胆に神に近づき祈ることが可能である(ヘブル7:24-25)。キリスト者が祈りを「主イエス・キリストによって」と言って閉じるのは、意味の無い形式主義ではない。

**24 求めなさい** 聖霊なる神による喜びと確信、その御名による祈りの成就是、使徒行伝3章以降を参考。あなたがたの喜びが満ちあふれるであろう 「喜び」(ギカラ)が20節より頻出している。この喜びは祈りへの応答の喜びであると同時に、聖霊なる神により賜る喜びと切り離す事ができない(使徒5:41)。

祈りはキリスト者の最大の特質である。祈りは、聖霊なる神によって、子なるイエスを通して、父なる神にささげられるものであり、三位一体の神による共同の働きに参画することである。ゆえに祈りは、神の方法で、神の栄光があがめられるため応えられる。

**参考図書** R・V・Gタスカ著『ティンデル聖書注解』(いのちのことば社)。『新聖書注解 新約1』(いのちのことば社)。『聖書神学辞典』(いのちのことば社)、他。

## 聖書

ヨハネ16・19～24

## タイトル

キリストの名による祈り

## 暗唱聖句

あなたがたが父に求めるものはなんでも、わたしの名によって下さるであらう。

ヨハネ16・23

## 目標

キリストの名による祈りの力を覚え、喜びをもって生きる。

## 導入

(松浦みち子)

三浦綾子さんの作品の中に「細川ガラシャ夫人」という作品があります。ガラシャは一五六三年に誕生し本名は玉子と言い、今から四五〇年ほど昔にクリスチャンとして生きた人です。洗礼名は「ガラシャ」「神の恵み」という意味があります。キリスト信者になることが迫害された時代にイエス様の十字架を信じ、死を覚悟してクリスチャンとなりました。亡くなる前に、幼い子供たちとの別れの場面が描かれています。「おかあちゃま、どこいくの?」3才の子が尋ねました。「よくおきき。母さまは、天の神さまのおそばにまいります。」13才の娘に、「そなたもどうか、母の信じた神さまを信じるように。」

そうすれば必ずまた会えますよ」「はい、お母さま、わたしもきっと神様を信じます」と。このように母と子は信仰による再会を望み地上の別れをしました。

## イエス様との別離と再会の望み

イエス様も十字架にかけられ亡くなる前の夕食の時、弟子たちに「しばらくすれば、わたしを見なくなる。またしばらくすれば、わたしに会えるであらう」とおっしゃいました。しかし、弟子たちは、イエス様の言われたことの意味が分からなくて戸惑っていました。イエス様はまもなく最後の説教が終わるとすぐに捕らえられ、十字架にかけられ、葬られるという、一連の出来事が起こることを見通しておられました。そして、弟子たちは戸惑い泣き悲しむ経験をするをよく分かっておられたのです。そこでイエス様は「よくよくあなたがたに言っておく。…あなたがたは憂えているが、その憂いは喜びに変わるであらう」と、たとえ話をされました。

女の人が赤ちゃんを産むとき、陣痛の痛みで、不安を感じ苦しみます。しかし、赤ちゃんが産まれ「おぎゃー」という泣き声を聞いた途端、それまでの不安や痛みがいっぺんに吹き飛んで、いい知れない喜びと感謝で、も

うその苦しみを忘れてしまいます。可愛い赤ちゃんをこの世に生まれた、という喜びに包まれるからです。このように、弟子たちがイエス様と再びお会いする時、「悲しみ、憂い、不安」がいっぺんに取り除かれ、喜びで満たされるという経験もそれに似ているとお話になりました。その喜びをだれも奪い去ることはできません。なぜなら、復活されたイエス様は、「見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである。」(マタイ28・20)と約束して下さっているからです。

### イエスの名による祈り

憂いが喜びに変わる「その日」が来たなら、「あなたがたがわたしに問うことは、何もないであろう。」と言われました。どういうことでしょうか。それは、イエス様の復活と聖霊が与えられるという、「約束の日」をさしています。イエス様は弟子たちとの最後の食事の時に語られたお話の中で次のように約束されました。

「わたしは父にお願いしよう。そうすれば、父は別に助け主を送って、いつまでもあなたがたと共におらせて下さるであろう。」(ヨハネ14・16)

「助け主、すなわち、父がわたしの名によってつかわ

される聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、またわたしが話しておいたことを、ことごとく思い起させるであろう。」(ヨハネ14・26)と。

今は、復活されたイエス様が天にお帰りになられたので、そのお姿を見ることはできませんね。しかし、イエス様は再びこの地上に再臨なさるのです。その日が約束されています。この確かな再臨の約束と聖霊の約束のゆえに、今を生きるわたしたちはイエス様の名名によって何でも祈り求めることができるのです。なんて嬉しいことでしょうか。「よくよくあなたがたに言っておく。あなたがたが父に求めるものはなんでも、わたしの名によって下さるであろう。…求めなさい、そうすれば、与えられるであろう。そして、あなたがたの喜びが満ちあふれるであろう」と、わたしたちに語りかけておられます。あなたもイエスの名による祈りの力を体験して下さい。どんな事でも祈って下さい。イエス様と共に歩むことがどんなに楽しく、喜びに満ちたものかをぜひ体験しましょう。(具体的な祈りの体験を証して下さい)

主は生きておられ、祈りに耳を傾けて下さっています。  
♪祈ってごらんわかるから♪(イン70、新聖歌481他)



# 牧羊ひろば



## 北大阪教会 教会学校

### ●教会学校の概要

北大阪教会では毎週日曜日午前九時から教会学校を行います。最初に礼拝を献げ、続いて分級をします。幼小科は幼稚科、小学下級科、小学上級科です。現在は生徒十名、教師八名です。また、教会暦に従った年間行事も行っています。

中高生会は午前九時四五分から別室で行います。今年から礼拝後にも中高生会を開いています。

### ●教会学校の対象者

北大阪教会の教会学校は、信徒子女の教育を主な目的で行っています。教団が発行している牧羊者を用いて、各教師が準備をしています。

また、教会に来ていない子どもたちへの伝道のために子ども大会などを行っています。

今回は、教会学校で行っている特別な行事について紹

介いたします。

### ●教会学校の主な年間行事

#### 一、イースター

毎年、イースターには、教会学校の時間にイースター卵探しを行っています。事前にゆで卵をラッピングして用意します。前日の土曜日に、卵形のプレートにイスの下やテーブルの下やカーテンの裏などに貼ります。小さな子どもたちが見つけやすい場所にも貼ります。

そして、教会学校の礼拝が終わったあとで、幼稚科の子どもから卵探しが始まります。「あそこにある」「ここにあった」と大きな



花の日①



声を出して喜んで探します。探し終わった後に、たくさんプレートを集めた子どもから、見つけれなかった子どもにプレートをプレゼントします。そして、集めたプレートと卵を交換しますが、一人二個までです。それでも、自分で見つけた卵なのでとても誇らしそうにしています。

## 二、花の日訪問

六月第二聖日に花の日礼拝を行います。幼小科の礼拝を献げてすぐに自動車に分乗して出発します。そして、第二礼拝までに教会に戻り、子どもたちと一緒に礼拝を献げます。旭警察署と旭消防署に、日頃の感謝を込めて訪問して、



花の日②

教会で用意した鉢植えの花をプレゼントします。事前に連絡をしていますので、警察署も消防署も喜んで迎えてくれます。そしてご好意によって子どもたちはパトカーや消防車に乗せてもらえます。その時には、子どもたちはとても喜んでいきます。またはグッズのプレゼントをいただくこともあります。

毎回、事故なく怪我なく行つて戻れますようにと祈ります。主は祈りに答えてくださり、これまでトラブルなく行われています。本当に感謝です。

## 三、子ども大会

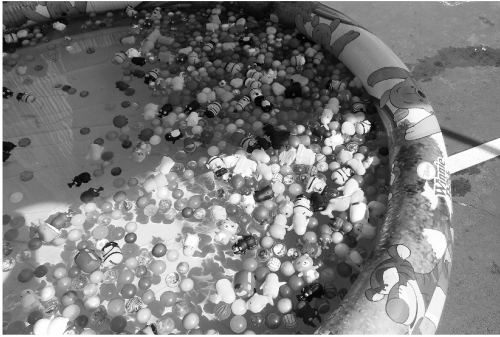
教会学校に来ていない子どもたちへの伝道のために、九月第二聖日の午後一時三十分から「子ども大会」を行います。前の週の半ばに、学校の前や近くで手分けして案内を配布します。校区外の小学校でも配布するようにしています。そのため、いろいろな小学校から子どもたちが集まります。子どもだけで校区外に出られないので、保護者も一緒に参加してくれます。

内容は、第一部が賛美と祈りとメッセージ、第二部がお楽しみ会です。おやつとしてフランクフルト、ミルク

せんべい、ポップコーンを用意しています。ゲームとしてスーパースクールすくい、輪投げ、ビンゴゲームを準備しています。案内に引換券を印刷していますが、持っていない人のために引換券を用意しています。引換券にチェックするので、一人で何度もおやつをもらう子どもはいません。

子どもも保護者も一緒に楽しんでいきます。おやつは毎回八〇人分を用意していますが、全部なくなります。時には足りない時もあります。

子どもの頃に子どもも大会に来ていたという保護者もおられ「変わっていないので安心しました」と言われたことがあります。長年この地域で伝道してきた結



子ども大会

果を教えられて感謝しました。一度でも教会に来てもらいたいと願って子ども大会を行っています。これからも継続できるように祈っています。

#### 四、児童祝福式

毎年十一月第二聖日第二礼拝中に児童祝福式を執り行っています。対象者は小学生以下です。子どもたちの成長のために祈ります。普段教会学校に来ていない信徒の子どもたちや孫まで案内を出すようにしています。そして、礼拝堂の前に出て、牧師が一人一人のために祈ります。その後、お祈りしてもらった子どもは会堂の後ろに行ってプレゼントをもらいます。プレゼントは箱入りのおかしを準備しています。一人一人お祈りするの、少し時間がかかりますが、子どもたちも保護者も喜んでいきます。

#### 五、クリスマス子ども大会

毎年十二月第二聖日午後一時三十分から「クリスマス子ども大会」を行っています。内容は一部が賛美と祈りとメッセージです。二部がゲームとハンドベルとクリスマス

マス劇とプレゼントです。

ハンドベルとクリスマス劇は、十一月から生徒と教師と一緒に練習します。毎年、劇の配役と練習に苦労しますが、劇の練習を通してクリスマスの意味を味わえることは感謝です。

地域の子ども会活動やクラブ活動で、当日の出席者の人数は多少の変化はありますが、子どもだけで六〇〜八〇名の出席です。一度だけでも教会に来てもらいたいと願って行っていますが、リーダーの子どもの多いです。この子どもたちが、将来救われますようにと祈っています。



クリスマス

スが渡すようにしています。教会員の中には聖書的でないと言われる方もおられますが、子どもたちが楽しみにしていますので、あえて継続しています。

## 六、CSお楽しみ会

毎年春分の日に「CSお楽しみ会」を行っています。この会は、生徒と教師が仲良くなることを目的に行っています。以前はCS遠足として野外活動をしていましたが、現在は教会内で生徒と教師が共同で工作をしたり遊んだり料理を作っています。分級で担当していない子どもたちとも仲良くなれて、とても楽しい時を過ごしています。

ある年は子どもた



CSお楽しみ会

ちが厨房に入りきれなかったり、ある年には工作の時間が長かったりと、問題があっても次回には改善して、生徒と教師が仲良くなれるように工夫しています。

## 七、子どもプール

小学生以下の子どもを対象に、今年から「子どもプール」を始めました。今年は七月二一日礼拝後に行いましたが、好評のため八月一八日にも行いました。長さ3m、幅1mの大きなビニールプールを用意して、教会の駐車場に日よけ用のテントを張って行いました。

教団では教会行事で遊泳は禁止されていますが、ビニールプールなら大丈夫だと判断して行いました。



子どもプール

た。

プールの中にたくさんビニールボールを浮かべてボール取りをしたり、水風船投げや水鉄砲遊びをしました。猛暑の中でしたが、プールの周りを教師や保護者が垣根のようになって監視して、プールの水温が上がりすぎないように氷をプールの中に入れて、子どもたちが安全に遊べるようにしました。

プールの他に、かき氷と飲み物コーナーを作り、子どもはもちろんのこと、大人たちも喜んで食べて良い交わりの時となりました。人と遊ぶことが苦手な子どもも、プール遊びで他の子どもたちと楽しく遊ぶことができたことを主に感謝しました。来年も続けたいと思っています。

## 八、母の日、父の日

毎年五月第二聖日に「母の日」を、六月第三聖日に「父の日」を行っています。教会学校の分級の時間にプレゼントを作成します。毎年違う工作を考えるのが大変ですが、雑誌やインターネットなどから情報を集めて、試作などをして準備をします。



母の日



父の日

また、礼拝の報告の時に子どもたちが教会の婦人、壮年にプレゼントを手渡しします。壮年、婦人たちには好評です。

中高生会では教会員の家族写真やお友だち同士の写真を撮影して、壁新聞のように模造紙に貼って「ファミリー写真」として掲示します。これも、大変に好評です。

## 九、ファミリーキャンプ

毎年、八月に聖日の礼拝後から月曜日の午後の一泊二日でファミリーキャンプを行っています。以前は土曜日から月曜日の二泊三日でしたが、利用していたキャンプ場が自炊で、食事の奉仕者に大きな負担となりました。そのために、昨年からは食事付きの宿泊施設を利用しています。

CSの生徒はもちろんのこと、保護者や教会員も参加して神の家族（ファミリー）を体験することを目的としています。CSの集会だけでなく、大人のための集会も用意しています。自由時間も長くとっているのです。教会ではできない信仰の証しをしたり、交わりを持つことができます。特に、子どもたちは夜の時間まで楽しく遊ん

でいます。霊的な恵みとお楽しみが凝縮されたキャンプです。今後も継続されて、子どもたちが神の家族であることを体験して成長できるように、と祈っています。



ファミリーキャンプ

### ●今後の課題

これまで、教会員の子どもたちを対象に教会学校を行っていましたが、何とかして、未信者の家庭の子どもたちが教会学校に参加できるようにと願っています。日曜日の朝早くに子どもを教会に送り出してくれる家庭はありません。そこで、子育て世代への伝道が必要であると感じています。現在、子ども大会、クリスマス子ども大会に保護者が一緒に参加してくれています。その人たちへのアプローチを模索しています。祈り求めるなら、主が道を開いてくださると信じています。

(山本敬夫)



## おわりに

『牧羊者』二〇一九年度第Ⅳ巻をお届けできますことを感謝します。また、執筆者のご労苦に感謝いたします。巻頭言は熊本真愛教会牧師、青少年室長の金田洋介師が執筆してくださいました。教師養成講座は香登教会牧師の工藤弘雄師が執筆してくださいました。「牧羊ひろば」は北大阪教会のCSを紹介していただきました。今号の執筆者、奉仕者を紹介いたします。

## 『牧羊者』のご購読・ご利用について

\* 分級用に、ワークA(幼稚園向け)、B(主に小学生1～3年生向け)、C(主に小学生4～6年生向け)を用意しています。また、付録として「子ども聖書日課」、「フラッシュカード」、「み言葉カード」、「中高科へのヒント」があります。いずれも、下記ホームページから無料でダウンロードできます。送付ご希望の方には、ワークは各600円+税でお送りします。  
信徒局 教会教育室 ホームページ  
<http://cs.jccj.info/>

\* ご注文は、日本イエス・キリスト教団(事務局)まで。申込み、部数変更等のための用紙も、上記ホームページからダウンロードできます。  
神戸市兵庫区塚本通3-3-19  
電話 (078) 575-5511  
FAX (078) 575-6611

聖書講解	石田高保師	小泉 創師	福井文彦師
研究資料	金井信生師	宮澤清志師	辻林和己師
メッセージ例	加藤 満師	飯田勝彦師	土屋開夫師
ワーク(A)	松浦みち子師	和田牧子師	
(B)	鎌野 幸師	吉田美穂師	宇野真佑美師
(C)	山下大喜師	三輪直子師	竹崎光則師
中高科へのヒント	勝田幸恵師	野勢かほる師	
子ども聖書日課	上森恭子師	田中裕明師	八幡直人師
フラッシュカード	後藤健一師	三輪正見師	石田高保師
み言葉カード・イラスト	田中愛子師	金田ゆり師	
ワープロ打ち込み	丹羽 遥師	松浦あん師	後藤栄子師
校 正	加藤 満師		
	松浦あん師	後藤栄子師	加藤 満師
	多田豊子師		
	後藤健一師	中島啓一師	

また、事務作業・発送の教団事務所の兄姉、印刷の松木共栄印刷、菱三印刷に心から感謝いたします。(中島啓一)

## 聖書教育教案誌 牧羊者 二〇一九年度 Ⅳ巻

二〇二〇年一月一日発行

発行所 日本イエス・キリスト教団 信徒局 教会教育室  
企画監修 日本イエス・キリスト教団 信徒局 教会教育室  
神戸市兵庫区塚本通三三三一九

印刷所 菱三印刷株式会社  
電話 (078) 575-5511  
FAX (078) 575-5511  
電話 (078) 575-5511

\* 日本聖書協会『口語訳聖書』使用許諾済み